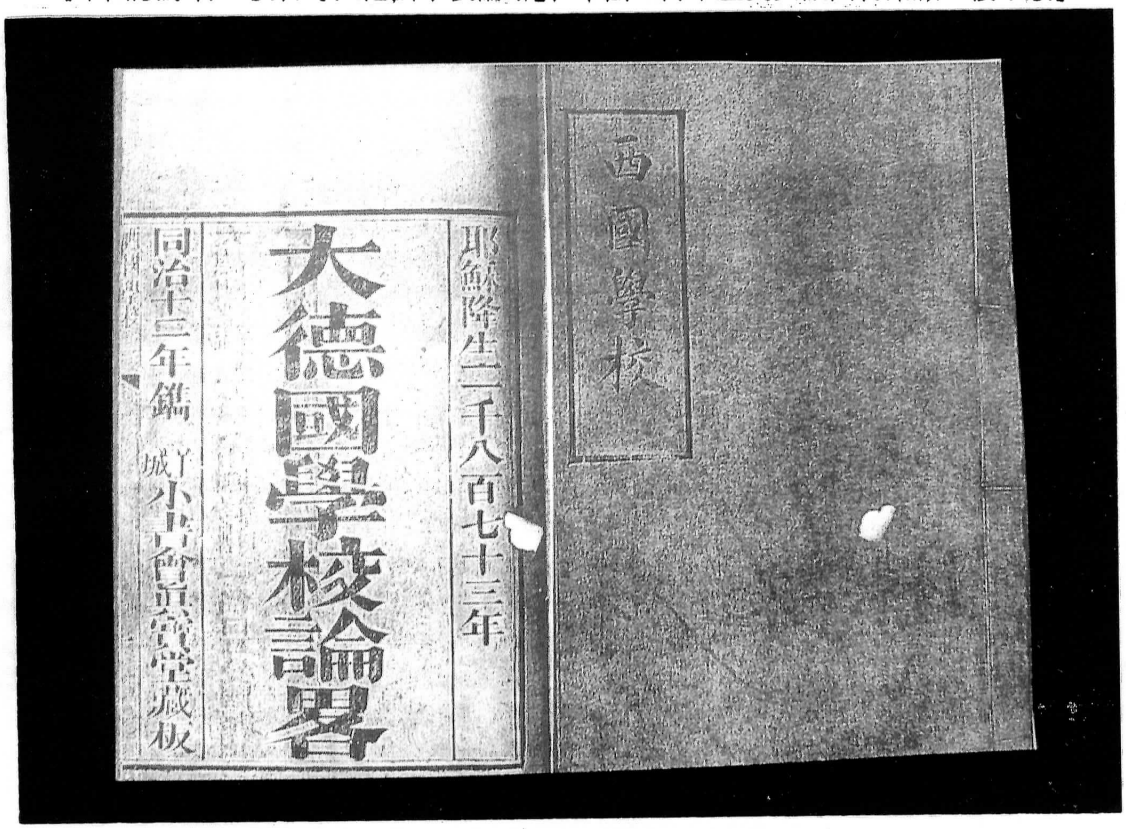
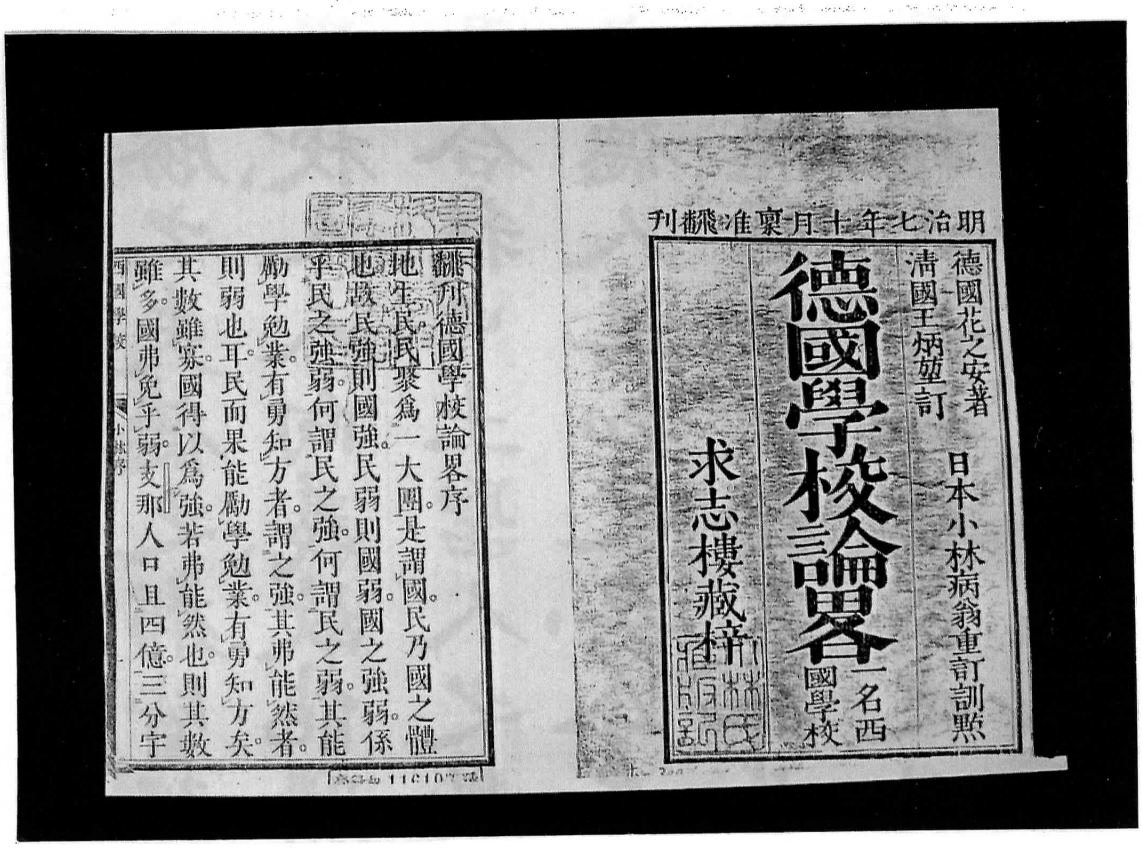
【中国版原書：漢書『大德国学校論略』、中国上海市歴史文献図書館蔵の複写版】



【日本版：小林虎三郎翻刻『徳国学校論略』、新潟県長岡市立中央図書館蔵】



【中国版原書：德國花之安著『大德國學校論畧』の序】

德國學校論畧序

比年德與諸鄰國戰、必大勝之夫德之鄰、皆强國也、而德之兵、必出於學校、人人向義、故能勝之、竊歎德之用兵、何以甚合我中土聖人之教也、以不教民戰、是謂棄之、德人其知之矣、今年德教士花君之安、以所著德國學校論畧、介美國衛公使、問序於余、余展讀之、始知德國之必出於學校者、不獨兵也、蓋其國之制、無地無學、

上海市歷史文獻圖書館藏

【日本翻刻版：小林虎三郎訓点『德國學校論畧』の「序」】

德國學校論畧序

此年德與諸鄰國戰、必大勝之、夫德之鄰、皆强國也、而德之兵、必出於學校、人人向義、故能勝之、竊歎德之用兵、何以甚合我中土聖人之教也、以不教民戰、是謂棄之、德人其知之矣、今年德教士花君之安、以所著德國學校論畧、介美國衛公使、問序於余、余展讀之、始知德國之必出於學校者、不獨兵也、蓋其國之制、無地無學、

漢書『大徳国学校論略』の明治日本への翻刻紹介

ー日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（Ⅰ）ー

信州大学　　坂本保富

はじめに

江戸時代の幕藩体制社会から明治の近代統一国家へと転換する近代日本の誕生は、実に難産であった。一般に、明治維新の変革は、西洋列強諸国による外からの軍事的インパクトと、それへの対応を余儀なくされた国内における危機的インパルスとの合力によって、輻湊したパラダイム変革へのダイナミズムの所産として惹起された歴史的な現象、と理解することができる。しかし実際には、幕藩体制社会を突き抜けるよりも、中央集権の近代国家体制を確立することの方が、はるかに困難であった。それ故、明治の夜明けには、内外的な緊要課題が山積していて、理想と現実との懸隔は大きく、決して順風満帆の船出とはいかなかった。内憂外患の危機的状況の中で、新たな国家建設の在り方を含めた日本近代化の推進は、西洋先進諸国をモデルとする西洋化現象であった。かつて、日本の近代化研究を主導した丸山真男は、近代化のタイプを「自然成長的近代化」と「目的意識的近代化」との二つに類別して特徴的に把握した[1]。彼の類型に従えば、日本の近代化は、正に後者であった。すなわち、「自然成長的近代化」を達成した欧米の近代国家をモデルとして、その成果を効率的に摂取し、上からの国家主導で短期間に近代化を達成しようとする後発型であったといえる。

だが、その場合、欧米先進諸国の中で、如何なる国を日本近代化のモデルとして選択するか、が問題であった。維新当時において選択枝として考えられたのは、フランス、イギリス、アメリカ、そしてドイツであった。もちろん、選択は一つの国に限定されていたわけではない。当然、欧米の近代文明を受容する日本の立場からみれば、比較校合の上での採長補短という観点から、複数国の成果を種々の条件面で検討し、選択的に摂取することは可能であった。事実は、正にそうであった。だが、その場合にドイツは、欧米四カ国の

中では、日本近代化モデルとしては最も不適当な事例として消去された。もちろん、選択に際しては、欧米各国と日本との歴史的な関係性の浅深強弱の度合いが影響していたことは間違いない。しかし、ドイツが採用されなかった最大の理由は、欧米四ヵ国の中にあって、いまだ発展途上の後進国であったという厳粛な事実、すなわちドイツ自身が西洋社会の中では後発型の「目的意識的近代化」の国であったということである。その結果、日本の近代化は、フランスとアメリカ、そしてイギリスをモデルとして出発した。だが、その後の近代化推進の過程で、理想としてのモデル（仏米英）と理想化すべき現実（日本）との狭間での現実的な条件面において、埋めがたい懸隔が認識され、やがて「モデルの変更」という重大な事態に立ち至った。すなわち、明治１５年（１８８２）３月の伊藤博文一行による憲法取調を目的とした欧州諸国への出張を契機に、明治１０年代後半から２０年代初頭にかけて、日本近代化のモデルがドイツ型に転換されたわけである。

以上のような日本近代化過程における試行錯誤は、近代化の成否を左右する最も基礎的分野である教育の世界においても決して例外ではなく、教育近代化モデルを巡って同様な現象が認められた。維新時には、幕末期以来、蓄積されてきた欧米各国の教育に関する多種多様な情報が吟味され、その結果、学校制度に関してはフランスをモデルとした国民皆学の「学制」が明治５年（１８７２）に発布された。他方、学校教育の内容や方法、教材や教具などに関する実際面では、アメリカの成果が導入された。しかしながら、そのような出発当初の教育近代化の在り方は、明治１０年代の後半以降、抜本的に見直され、前述のごとくに、ドイツ・モデルによる日本独自の教育近代化路線に方向転換されたわけである。

だが、はやくも学制発布の直後において、多難な日本の教育近代化の問題現状を冷静に認識し、フランスやアメリカではなく、ドイツ型の近代化こそが日本近代化のモデルに相応しい、と指摘した先駆的な人物がいたのである。彼は、そのような自説の正当性を証明するかのごとくに、いち早くドイツの学校教育を中心とした西洋先進諸国の教育文化を、日本に紹介していた。はたして、その人物とは誰であったのか。幕末期に佐久間象山（１８１１－１８６４）の私塾に入門して、彼の「東洋道徳・西洋芸術」思想を学んだ越後長岡藩の小林虎三郎（１８２７－１８７７）であった。彼は、清朝中国の教育近代化の問題状況との比較で、ドイツを中心とする西洋先進諸国の教育文化を紹介した漢書『大徳国学校論略』に注目し、これに訓点を施して翻刻し、明治初期の日本に紹介したのである。日本における近代学校制度の発足を告げる最初の学校教育法である「学制」の発布から、僅

か２年後の明治７（１８７４）年のことであった。この彼の業績は、日本にドイツ型の西洋学校教育制度を本格的に紹介した嚆矢であり、実に先駆的な功績であったと評することができる。

現今では、小林虎三郎といえば、教育的な美談として有名な史実「米百俵」の主人公のこと。それ故、虎三郎は「米百俵」と共に想起され研究されてきた。地元である越後長岡の関係者以外で、最も早い時期の代表的な研究成果は文豪・山本有三の作品『米百俵』（１９４３年）であった[2]。同書は、「米百俵」が単なる美談ではなく史実であることを論証し、主人公である虎三郎を世に知らしめた功績は大きい。だが、有三の作品では、虎三郎への注目が「米百俵」という極めて限定的な観点からの研究成果であったが故に、彼の教育関係を中心とする日本近代化に関わる様々な先駆的な業績が、全く看過されてしまった。美談である史実「米百俵」の出来事は、彼が描いた教育的軌跡の一つの断片に過ぎない。すなわち、「米百俵」の美談を強調する余りに、日本近代化に関わって展開された虎三郎の教育的軌跡の全体像が見過ごされてしまったということである。

したがって、彼が明治７年（１８７３）に翻刊した『徳国学校論略』についても、存在自体は知られていたが、何故に彼が漢書である同書を日本に翻刻紹介したのか、はたして同書の内容や特徴は如何なるものであったのか、等々の基本的な事柄に関する学術的な研究は皆無であった。

上述のような虎三郎研究に関する問題状況を踏まえて、以下の本稿では、彼が翻刻した『徳国学校論略』の内容と特徴の分析はもちろん、同書の刊行に関わった人たち－原著者であるドイツ人宣教師、中国人の校訂者と推薦者、そして日本に翻刊紹介した象山門人の虎三郎－が、同書の刊行に込めた意図などを含めた諸々の事実を解明し、もって近代化過程にあった明治初期の日本にとって、ドイツと中国の比較近代化に関わる教育的な情報を提供した同書の歴史的な意義を考察しようとするものである。

（一）虎三郎が日本に翻刻紹介した『徳国学校論略』

（１）虎三郎と『大徳国学校論略』との邂逅

虎三郎は、越後長岡藩にあって、早くから将来の学問的な大成を嘱望された俊英であった。彼は、嘉永４年（１８５１）、数え２４歳のときに江戸へ藩費で遊学し、当時、洋儒兼学の開国論者として令名を馳せていた、信州松代藩出身の佐久間象山が江戸で主宰する洋儒兼学の私塾に入門する[4]。彼は、勝海舟や坂本龍馬、吉田松陰や橋本左内、西村茂樹や加藤弘之など、数多（あまた）の著名な象山門人たちの中にあって、地味ではあるが最も誠実に恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」という学問思想を学び取った奇特な門人であった。その彼は、江戸の象山塾へ入門した直後、奇しくもペリー艦隊の浦賀来航という歴史的な大事件に遭遇する。その際に彼は、恩師象山の説く横浜開港説を実現すべく、当時、幕府の老中職にあった長岡藩第１１代藩主・牧野忠雅に意見書を提出した。だが、学問修行中の書生の分際でありながら幕政に関与せんとしたとして断罪され、即刻、地元長岡での謹慎という処罰を受ける。彼の運命を左右する青春の蹉跌であった。以後、彼は、戊辰戦争に敗れて廃墟と化した郷土長岡の復興を委ねられる明治維新の夜明けまでの１６年間、藩政の表舞台に出ることはかなわず、ひたすら長岡の自宅に謹慎して学究の生活を送った。

長岡藩にとって明治の夜明けは、絶望に満ちた凄惨な幕開けであった。戊辰戦争での無条件降伏の結果、辛うじて藩の存続だけは許された。が、官軍の砲火によって廃墟と化した長岡の人々の生活は、筆舌に尽くしがたいほどの困窮を極めた。かかる敗戦後の悲惨な状況下で、新生長岡の復興を委ねられたのが、他ならぬ虎三郎であった。彼は、戊辰戦争に際しても非戦論を主張し、長岡藩の命運を担った畏友の軍事総督・河井継之助とは、終始、対立した。だが、明治２年（１８６９）６月、戊辰戦後の藩政改革で、虎三郎は、旧家老職に相当する大参事という藩の重役に抜擢されたのである。期せずして彼は、継之助に替わって藩政の表舞台に登場することになった。就任以来、彼は、絶望の淵にあって希望を遠望して、学校建設による人材育成を基本政策とする教育立国主義を掲げ、郷土長岡の復興に向けた基盤作りに奔走した。

だが、様々な復興施策が軌道に乗りかけた矢先の明治４年（１８７１）８月、廃藩置県の公布による長岡藩の終焉を契機に、彼は、藩の公職の一切を辞して郷里長岡を去り、上京してしまう。表向きの理由は、長年患った持病の療養であった。が、その後、彼は二度と郷里長岡の地を踏むことはなかった。覚悟の出郷であったといえる。何故に、再生の端緒に着いたばかりの郷里長岡を後にしたのか。４０代半ばの彼にとっては、勇気のいる人生の大きな決断であった。彼が、終生、畏敬して止まなかった恩師の佐久間象山は、愛弟子である吉田松陰の海外密航事件に連座して江戸伝馬町の牢獄に繋がれたが、そのとき彼

は、獄中で四十余年の半生を省み、自身の辿ってきた世界観の拡大過程を、学問的な軌跡と人生の展開とを重ね合わせて、獄中記『省萱録』の末尾に、次のような漢詩に表現した。

余、年二十以後は、乃ち匹夫の一国に繋ること有るを知る、
三十以後は、乃ち天下に繋ること有るを知る、
四十以後は、乃ち五世界に繋ること有るを知る。(5)

門人の虎三郎にとってもまた、大志を抱いて江戸に遊学した若き日に、罪をえて郷里長岡に謹慎してから１８年という長い間、特に戊辰戦後の長岡復興に挺身した最後の数年間は、恩師と同様、正に「匹夫の一国に繋ること有るを知る」という長岡藩一国に繋る人生の展開であった。だが、不治の病に苦しむ己を「病翁」と改名して、郷里長岡と惜別する晩年の虎三郎とっては、青年の日に抱いた青雲の志ー「天下に繋る」あるいは「五世界に繋る」ような学問思想の大成を夢みた初心を貫徹するという、青春の只中で己自身に約束した責務が待っていた。それ故、郷里長岡に惜別して上京したことは、己自身に対する債務の履行のためであり、それは同時に恩師象山の学恩に報いる道でもあったといえる。

郷里長岡の復興事業に忙殺された奔走の日々から解放され、自由の身となって１８年ぶりにみる首都東京は、かつての江戸ではなかった。人も世も一変していたのである。上京して間もなくに、彼は、往事を偲んで「東京に抵る」と題した次のような漢詩を詠んでいる。

十八年前北帰の客
一千人外再遊の人
旧朋瓢散して尋ぬる処無く
何限の情懐孰れに向かいてか陳べん

余此の詩を友人蟻川某の処に観る。先生再遊のとき、旧朋凋謝す。
此の嘆ある所以なり。

奕葉の覇図夢一場
空しく看る松樹厳霜に傲るを

城楼旧に依りて人旧に非ず
黍離を賦せざるも亦断腸[6]

【意訳】

１８年前、初めて江戸に遊学してから、ペリー来航に遭遇し、恩師象山の横浜開港説を奉じて藩主に上書した。だが、この行動によって藩当局より処罰を受け、即刻、越後長岡に帰還し謹慎を命じられた。今、久しぶりに江戸に来てみると、すでに恩師の象山先生は斬殺されて此の世になく、共に学んだ同門の旧友たちも、霧散して居所さえも知るよしがない。再会して話したいことは尽きない。だが、一体、誰に向かって我が胸中の思いを開陳すればよいのか。

編者である私は、この虎三郎の漢詩を象門旧友の蟻川賢之助の所で拝見した。先生（虎三郎）が初めて江戸に遊学してから十八年後に再び上京した折り、旧知の友どちは何処に散ってしまったのか、居場所さえもも知れず、嘆き悲しんだと、先生はいうが、私も、今また先生と同じ心境である。

何代も続いた徳川幕府の栄華は、今は夢のように跡形もない。江戸城の松の木は、何事もなかったかのごとくに聳え、城の天守閣は旧態依然として偉容を誇っている。だが、そこに住む人は嘗ての人ではない。宮殿の跡には黍の穂が垂れており、この荒れ果てた景色を見ると、詩も詠めないほどに断腸の思いに駆られる。

虎三郎は、草創期の慶応義塾に学んで洋学を修めた実弟の雄七郎を頼って上京した。早速、彼の上京を知った旧知の維新政府関係者から、彼は、文部省の博士職への任官を要請された。だが、当時、維新政府の官職にあった象門後輩の北沢正誠（信州松代藩出身、１８４０－１９０１）が、「朝廷其の能を知り、将に之を擢用せんとすれども、病を移へて出でず[7]」と証言するがごとく、彼は病気を理由に、維新政府への出仕を辞退した[8]。癒える望みのない療養生活の中で、やがて彼は、自己の半生をかけて探究してきた学問と思想が、決して徒労のものでなかったことを実感させてくれる運命的な一冊の書物と出会うことになる。それが、『大徳国学校論略』という漢書であった。彼は、中国で出版されて間も無い、この書物を一読して共感した。是非とも同書を近代化の端緒にある日本に紹

介して、文明開化、即ち日本近代化の在り方やその下での教育近代化を検討する手掛かりに供したいとの国家的次元での願望から、彼は、急ぎ同書に訓点を施して翻刻し、日本に紹介したいとの決意に立ち至ったものと推察される。そして、彼の労苦は報われた。翻刻版『徳国学校論略』が日本で刊行されたは、彼が、郷里長岡を辞して３年の歳月が流れた明治７年（１８７４）の１０月、４７歳の秋であった。

（２）漢書『大徳国学校論略』の著者ドイツ人「花之安」とは

虎三郎の翻刻によって、明治初期の近代化過程にある日本に紹介された『徳国学校論略』の正式な原著名は、前述のごとく『大徳国学校論略』というものであった。なお、同書には「西国学校」という副題が付されていた。出版年は「耶蘇降生一千八百七十三年　同治十二年鐫（せん）」（西暦１８７３年）、日本の明治６年であった。版元は「羊城　小書会真実堂蔵板」、すなわち中国広東州の省都広州であった[9]。原著者は、同書に記された「徳国花之安」というドイツ人宣教師であった。これに中国人の「王炳堃」という人物が校訂を加え、１８７３年に清朝中国下の広州で出版された。そのような同書を、漢学に造詣の深い虎三郎は、はやくも翌年の１８７４年（明治７）１０月に訓点を施して翻刻し、いまだ近代化推進の端緒にあった明治初期の日本に紹介したのである[10]。実に機敏な対応であった。

ところで、原著者であるドイツ人の「花之安」とは、一体、どのような人物なのか。これまでの日本の先行研究では全く不明であった[11]。実は、彼は、キリスト教伝導のために、若くしてアヘン戦争後の清朝末期の中国に渡来したドイツ人宣教師であった。彼のドイツ名は、「Faber Ernst（ファーベル・エルンスト）」、１８３９年４月にドイツで生まれ、１８６５年に「中国基督教礼賢会香港区会」（Rhenische Missionsgesellschaft）の宣教師として、イギリスの租借地である香港に赴任し、やがて広東州の広州で活躍した[12]。ところが、１８８０年には礼賢会を辞して独立し、再び香港に移住して伝導活動に挺身した。しかし、１８８５年には、新たに中国に開教された同善会（Allgemeiner Evangelisch Protestantischer）に請われて同会の宣教師となり、清朝政府が直轄する国際都市の上海に移り住んだ[13]。最晩年の１８９８年には、ドイツ帝国が中国山東省の港湾都市・青島（Qingdao）を占有すると同時に、今度は青島に移住した。だが、その翌年、彼は、同地で６１歳の一期を閉じ

た。人生の後半生の３０数年間を、東洋の異郷中国で宣教師として生きた彼の人生は、キリスト教伝道においても米英仏の後塵を配したドイツ帝国の中国進出に呼応して展開された[14]。

上述のような『大徳国学校論略』の原著者であるドイツ人宣教師「花之安」（Faber Ernst）の中国での履歴に関しては、戦前日本のキリスト教研究の成果を示す比屋根安定著『支那基督教史』には、次のように記述されている。そこに、何故に彼が所属する教会を変え住居地を移したのか、その経緯を窺い知ることができる。

> 同善会はワイマルに組織された年の翌年、即ち光緒十一年（明治十八年、一八八五）、ファベル（『大徳国学校論略』の原著者「花之安」のこと、筆者注）を招聘した。先にファベルは、同治四年（慶応元年、一八六五）、礼賢会の牧師として香港に来り、広東省にて伝導していたが、光緒六年（明治十三年、一八八〇）礼賢会を辞して、香港にて独立伝道を為していた所、光緒十一年（明治十八年、一八八五）同善会に請はれて転入し、翌十二年上海へ赴いて伝道及び教育に従ったが、光緒二十五年（明治三十二年、一八九九）独逸が青島を占領するや、同地に赴いて開教したが、間もなく卒去した。ファベルは、孔子及び孟子に関する著書があるが、支那の花類に関する著書もある。[15]

さらに別のキリスト教研究に関する先行研究－佐伯好郎『清朝基督教の研究』には、宣教師として活躍した彼の略歴に関して、上記の内容を補って余りある、次のような貴重な研究成果が示されている。

> ・独逸礼賢会の新宣教師花之安（ファーベル）（Ernst Faber）が一八六五年に香港に到着し、広東省内の伝道を開始した。ファーベルはエナ大学の神学博士で、造詣深き学者であった。その英文著書、“A Systematic Digest of the Doctrines of Confucius.”“The Mind of Meneius.”“Introduction to the Science of Chinese Religion.”“Pre-historic China.”などの外に、同治十三年（西暦一八七四年）に著した漢文の『馬可講義』がある。その中国の経典を穿鑿（せんさく）し諸子百家の説を弁駁（べんばく）して、基督教新教のために万丈の気焔（きえん）を吐いていることも周知の事実である。ファーベル博士は、一八九七年青島が独逸兵によって占領されるや否や独逸人の本性を発揮して直

に膠州湾の独逸領に移ったが、一八九九年に歿したから義和団事件を知らずしてこの世を去った頗る幸福な宣教師の一人である。[16]

・有名なファーベル（Ernst Faber）即ち花之安先生は、後に同善会に入った。このファーベルは最初一八六五年に香港に来た宣教師で頗る漢学に長じ、『論語』及び『孟子』に関する著書や漢文の『馬可講義』等がある。[17]

上記引用の資料によって『大徳国学校論略』の著者であるドイツ人宣教師「花之安（Ernst Faber）」が、何と神学博士の学位を有する学者的宣教師であったこと、特に語学の才能は顕著で、英文の著書はもちろん、中国語にも精通して漢文の著書を幾冊も遺していた事実を知ることができる[18]。その彼が、中国語の漢文で著した著書の代表作が『馬可講義』であり、そして『大徳国学校論略』であった。

（３）虎三郎翻刻の『徳国学校論略』に関する先行研究の誤謬

中国で出版された『大徳国学校論略』は、これまでの日本の先行研究では、後述するごとく、「ドイツ人の宣教師によってドイツ語で書かれた著書で、それを日本の小林虎三郎が日本語に翻訳して出版した」と誤解されてきた。前述の原著者「花之安（Ernst Faber）」の中国での経歴についての論究で明らかなごとく、これは大いなる誤謬である。筆者は、ドイツ人宣教師である原著者が中国語の漢文で同書を執筆したことを証明する前述のような諸資料（先行研究）に遭遇する以前に、中国で出版された原著書『大徳国学校論略』の存在を確認し、その複写版を中国から入手していたのである。それ故、原著者であるドイツ人の「花之安」は、同書を中国語の漢文で執筆したことは疑いえない事実であることを確認していた。語学力に秀でた神学博士の彼が、中国語で『大徳国学校論略』を執筆したということは、生来の語学的な才能が長年の中国生活で錬磨され、中国語を自由自在に操れるほどに熟錬していたことの証でもあった。

日本の虎三郎は、上記のような中国の漢文で書かれた原書を入手し、それを当時の日本人が読解できるよう白文に訓点を施し、中国での原著の出版の翌年、すなわち１８７４年（明治７）の１０月に、日本で翻刊した。虎三郎が翻刊した日本版の書名では、原著名の「大」が削除されて単に『徳国学校論略』と表記された。副題の方も、原著書に付されて

いた「西国学校」が「一名西国学校」と変更された。日本版の表紙には、「徳国花之安著 清国王炳堃訂　日本小林病翁重訂訓点」と記されていた。なお、版元は「求志楼蔵梓」と刻まれていたが、これは虎三郎が同書を翻刊した当時に住んでいた東京向島の居宅（実弟雄七郎の邸宅）であった[19]。

虎三郎が翻刊した『徳国学校論略』を、中国で刊行された漢書の原著『大徳国学校論略』と比較してみると、両書の相違は、翻刊書に虎三郎の序文「徳国学校論略序」が、原著の冒頭に付加されただけで、後の序文や本文は頁数も改行も全く同じ複写版で、まさに「翻刻」であった。したがって、虎三郎が日本に紹介した『徳国学校論略』は、中国から入手した原著書『大徳国学校論略』に訓点を施しただけの「翻刻」であり、それ故に極めて短期間の内に日本へ紹介することが可能となったわけである。

叙上のごとく、原著書に「徳国花之安識」と記されている通り、同書は、中国在留の宣教師であるドイツ人の「花之安」という人物が、自ら漢文で執筆した書物であり、その内容はドイツを中心とする西洋先進諸国の学校制度の紹介であった。

ところで、従来の虎三郎研究の先行研究として画期的な作品は、前述のごとく山本有三『米百俵』（１９４３年）であり[20]、それに続く労作が松本健一『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』（１９９２年）であるといえるであろう[21]。だが、両書の記述内容を歴史学的な観点から精査し吟味してみると、虎三郎理解に関する重要な事柄について、明らかに事実誤認あるいは資料的根拠のない推察による叙述としかみられない誤謬が、いくつも散見される。特に問題点の多いのは、後者の『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』の方である。実は、問題とすべき具体的な事例の一つが、同書における『徳国学校論略』に関する記述である。同書では、ドイツ人がドイツ語で書いた『徳国学校論略』というドイツ語の原書を、虎三郎が日本語に翻訳して紹介したという誤った認識に立脚している。たしかに虎三郎は、オランダ語の翻訳能力はあったが、ドイツ語はできなかった。松本の同書では、そのような彼が、如何にしてドイツ語の原書を日本語に翻訳することができたのかという疑問が設定され、その謎解きが展開されている。

> かれはヨーロッパにおける新興国家ドイツ（プロシャ）の発展の秘密を、その学校制度にある、とみていた。これが、かれが同書を翻訳・略述した直接の動機にほかならない。[22]

虎三郎が日本に翻刻紹介した『徳国学校論略』に関して、上記のように全く誤った認識に立つ松本の『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』では、虎三郎の甥の孫に当たる作家の星新一が執筆した『祖父・小金井良精の記』を手掛かりに[23]、如何にして虎三郎がドイツ語の原書を日本語に翻訳することができたのかを解明しようとしている。

たしかに虎三郎には、ドイツ留学を経て東京大学医学部の教授となり、日本の解剖学の権威者となった優秀な甥がいた。虎三郎の実妹幸（ゆき）の次男・小金井良精（こがねいよしきよ）（１８５８－１９４４）である。彼は、草創期の東京大学医学部の一年後輩で、同じくドイツ帰りの医学者となった文豪の森鴎外とは昵懇（じっこん）の間柄にあり、その縁で鴎外の妹・喜美子を後妻に迎えていた[24]。それ故に、虎三郎の甥である良精と鴎外とは義兄弟の関係にあった。「米百俵」の主人公である虎三郎と文豪の森鴎外とが縁戚関係にあったとは驚きである。さらに驚くべきは、良精の娘が、星製薬株式会社の創始者で星薬科大学の創立者である星一（ほしはじめ）（１８７３－１９５１）に嫁ぎ、長男として誕生したのが人気作家の星新一であった、という事実である。新一は、祖父良精の住む東京本郷の邸宅に同居して育った。新一にとって、東京帝国大学医学部の教授で日本の解剖学の先駆者であった良精は、畏敬の人であると同時に、最も身近な理想的人間像であった。その祖父は、昭和戦中の１９４４年の１１月に病没した。享年８７。父親の製薬会社の後継者から作家に転身した新一は、後年、祖父の遺した詳細な日記を基に、『祖父・小金井良精の記』を著して追慕した。同書の中には、祖父の伯父に当たる虎三郎に関する記述が何カ所もある。『徳国学校論略』に関しても、次のような記述が収められている。

> この年には（明治７年、筆者注）、小林虎三郎が『徳国学校論略』という本を出版している。徳国とはドイツのこと。世界には広大な国土や、多い人口を持つ国がある。しかし、それが国力の条件ではない。ドイツは土地も人口もそれほどでないが、充実している。各人への教育が普及しているためだ。日本を向上させるのは、教育であるという内容のもの。『米百俵』の主張を、外国の例をあげて解説したもの。
>
> おそらく、この著述は良精の手助けによるものであろう。虎三郎はオランダ語にくわしく、維新後、英語をいくらか学んだ。しかし、ドイツ語はだめだった。良精がドイツについての紹介書を訳し、学校でのドイツ人教師の講義の内容などを話し、それらを参考に虎三郎が文にした。虎三郎は雄七郎の家に同居しており、休日には良精がよく訪れていた。[25]

上記の記述には、重大な誤謬がある。虎三郎の翻刻した『徳国学校論略』は、すでにみてきたように「『米百俵』の主張を、外国の例をあげて解説」した内容ではない。また、たしかに原著者はドイツ人宣教師であったが、原著書は中国語の漢文で書かれた書物であり、決してドイツ語の原書ではなかった。前述のごとく筆者は、中国で刊行された原著書『大徳国学校論略』の複写版を入手して、同書が中国語で書かれた事実を確認している。それ故、ドイツ語の原書を虎三郎が日本語に翻訳したという理解に基づく『祖父・小金井良精の記』の記述、「この著述は良精の手助けによるもの」「良精がドイツについての紹介書を訳し、学校でのドイツ人教師の講義の内容などを話し、それらを参考に虎三郎が文にした」などは、明らかに資料的根拠のない全くの誤謬である。

実は、前述の松本健一『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』は、上記のような全く資料的根拠のない誤謬に基づく『祖父・小金井良精の記』の記述をそのまま転用して、如何にして虎三郎がドイツ語原書の『徳国学校論略』を日本語に翻訳したのかという疑問を、次のように謎解きしているのである。

> 小金井良精は明治五年十一月に大学東校に入学し、二年で予科を終えている。予科での勉強は、語学としてのドイツ語のほかに、数学や物理や化学などもみなドイツ語で、それにラテン語と自然科学が加わるわけだ。良精はその予科のあと本科(五年)にすすんで、ドイニッツ教授のもとで解剖学をはじめたのである。そうだとすれば、かれは大学東校に入学することによって、その予科で明治五年十一月から七年十一月まで、もっぱらドイツ語の学習に明け暮れていた、ということもできる。十五歳ぐらいの良精が、虎三郎の『徳国学校論略』の翻訳・略述においてはたして手助けすることができたろうか、という疑問は、これでほぼ解消する。
>
> 虎三郎はオランダ語にくわしく、英語は初歩程度。雄七郎は英語をよくしたが、ドイツ語はあまりくわしくなかった。とすれば、ドイツ語ができ、学校でドイツ人の教授たちにその社会や教育制度について質問することのできる良精の手助けなしに、虎三郎が『徳国学校論略』をあらわすことは不可能だったろう。(26)

上記のような松本の『徳国学校論略』に関する理解と叙述は、星新一の『祖父・小金井良精の記』を根拠とした内容であることは明白である。資料的な裏付けの全くない推量に

よる叙述であった星新一の『徳国学校論略』に関する記述を、松本は、そのまま『われに万古の心あり－幕末藩士小林虎三郎』に援用したものと思われる。

以上のような誤謬に満ちた『徳国学校論略』の理解と紹介がなされる一方で、日本教育史研究の分野での先駆的な紹介が、何と戦時中の昭和１９年になされていたのである。山本有三の『米百俵』が出版された翌年のことであった。それは、当時、上智大学教授であった稲富栄次郎の『明治初期教育思想の研究』である[27]。同書では、虎三郎が翻刻紹介した『徳国学校論略』について次のように詳述されているが、その内容は、日本教育史学会の碩学であった著者自身が、明らかに同書を実際に手にとって内容を吟味していることを窺わせるものである。したがって、日本における『徳国学校論略』の本格的な紹介の嚆矢は、稲富栄次郎によってなされたといってよい。

わが教育界当時の実情を見るに、「学制」頒布後も、西洋の教育制度に関する研究はますます盛んになつていて、最初はドイツの教育制度が相当に研究せられたようである。即ちまず挙ぐべきは、明治十(ママ)年十月翻刊の、徳国花之安著、清国王炳堃訂、日本小林病翁重訂訓点の『徳国学校論略』一名「西国学校」である。本書はドイツの牧師花之安が著作したものを、中国人王炳堃が校訂し、更に日本小林虎三郎が重訂訓点を施したものである。そして原著者の序文には「耶蘇誕生一千八百七十三年」（明治六年）とあり、わが国における本書の翻刊がまた明治七年であるから、中国において出版せられた翌年早くも我が国において重訂翻刊せられているのである。さて花之安が本書著作の動機は、中国人が古来自国を以て中華となし、外国をすべて蛮夷部落となすの蒙を啓き、中国ひとり文教の国にあらずしてドイツの教育ははるかに中国のそれにまさることを、完備したその制度を通じて知らせ、兼ねて高度に発達した欧州文化の一般を知らしめようとするにある（同書序）のである。そして、その内容は、郷塾・郡学院・実学院を初め、順次ドイツにおける各種学校の制度・組織等を説明し、最後に、各国大学院総数、徳国書院数、……新聞紙・書籍源流等、ドイツ文化の現状に対して統計的に説明を加えている。（中略）

さて小林虎三郎が本書を重訂翻刊した趣旨は、巻頭の「翻刊徳国学校論略序」に明らかであるが、それによれば、中国と欧米と同じ国家でありながら、その国力を比較すれば全く「天渕懸絶」、前者は「萎(い)靡(び)弗レ振」（萎靡して振わず；筆者注、稲富の原文は全て訓点つきの漢文のままの引用であり、読み下しは筆者による。以下も同様の

扱い）であり、後者は、「虎嘯竜驤展威八溟」（筆者注：虎の如くに嘯き、竜の如くに躍り昇り、威を八方に展開する）というがごとき有様である。そしてかくのごときに至るゆえんのものは、ひとえに学問教育の普及如何によるのであるが、教育は欧米ことにドイツが最も盛んであって、「学校最盛教育最行、為二欧米各国所一レ推」（筆者注、学校最も盛んにして教育最も行われ、欧米各国の推奨する所となる）という有様であるから、日本の教育もこれに倣うべき所がすこぶる多い。これ本書を翻刊するゆえんであるというのである。そして本書が「学制」頒布以後の教育制度の確立に、実際上いかように活用せられたかはつまびらかでないけれども、小林が「彼学務之書、経二訳刊一者、和蘭学制今有二仏国学制一、亦方出、而徳国学校論略、又復舶齎」（筆者注：彼の学務の書、訳刊を経る者、和蘭学制有り。今、仏国学制有りて、亦方に出ず。而して徳国学校論略、又復して舶齎せらる）と言っているのを見れば、本書が前に公にされた『和蘭学制』や『仏国学制』と共に当事者の有力な参考資料であったことは確かであろう。(28)

上記の稲富の紹介文には、虎三郎が日本で翻刻刊行した『徳国学校論略』の概略を述べ、虎三郎自身の「翻刊徳国学校論略序」を踏まえて、明治初期における西洋学校制度論の受容状況の中で位置づけている。だが、そこには、翻刻された『徳国学校論略』の原本である漢書『大徳国学校論略』に関わる基本的な事柄（原書出版の経緯、原著者の経歴と執筆の意図など）については、全く触れられていなかった。また、虎三郎翻刻の『独国学校論略』からの引用は全て、そのままの訓点つきの漢文であった。

（4）『大徳国学校論略』に込められた関係者の意図

前述のごとく、中国で出版された『大徳国学校論略』は、ドイツ人宣教師「花之安」（Ernst Faber）が中国語で執筆した漢書であった。だが、同書には校訂者がいたのである。如何にドイツ人「花之安」が中国語に熟達していたとはいっても、最終的には中国人の専門家による漢文の校閲を必要としたわけである。それが「王炳堃」という中国人であった。彼が同書の漢文を校訂したが、さらに冒頭に推薦序文を寄せた別の中国人「李善蘭」という人物がいた。したがって中国で出版された『大徳国学校論略』には、著者と校訂者、そ

れに推薦者という３人の人物が関係していたのである。

いったい、何故に、ドイツ人の宣教師が、ドイツを中心とする西洋諸国の学校教育の制度に関する著書『大徳国学校論略』を、中国語の漢文で執筆し、中国で刊行したのか。まず第一に注目すべきは、ドイツ人宣教師が、イギリス人宣教師たちが学校教育を軽視したのとは逆に、アメリカ人宣教師と並んで学校教育の重要性を強調して布教活動を展開したという事実である[29]。前述の佐伯好郎『清朝基督教の研究』には、中国在留のドイツ人宣教師が、自国の進歩した学校教育をモデルとして中国で学校教育活動を展開したとして、次のように述べている。

> 独逸の学校教育が非常に進歩し、その施設が完備していたので、独逸宣教師もまた渡来と同時に中国人教役者の養成機関としての学校や、中国青年層に接近する一手段として諸種の学校を開始した。[30]

さらに原著者である「花之安」（Ernst Faber）自身が、自著『大徳国学校論略』に付した序文の中で、同書を執筆した動機を、次のように具体的に述べている。

> 毎(つね)に見て、華士、徒に泰西の器芸を艶(うらや)みて、其の聖道を棄て、器芸は葉なり、聖道は根なり、器芸は流なり、聖道は源なり、根無ければ則ち木必ず隕(し)に、源無ければ則ち川流れず、其の糟粕(そうはく)を掇(す)てて、其の精華を遺(のこ)すを知らず。甚為(はなはだ)之れを惜み、道伝の余に、嘗て徳国学校一書を輯(しゅう)し、略(ほぼ)書院の規模、学をなすの次第を言い、海内人士をして、泰西は僅かに器芸を以て長ずるを見るに非ず、器芸は蹄涔(ていしん)の一勺に過ぎざるを知らしむ。[31]

ドイツ人宣教師の目には、アヘン戦争の後の清朝中国は、なおも従来の伝統的な中華意識を頑なに墨守しつつ、他方においては性急に西洋物質文明の導入を図ろうとして四苦八苦している状況にあると映った。そのような中国人の中華意識に基づく偏った西洋認識、いわゆる中体西洋思想に基づく洋務運動に接した彼は、西洋文明の本質や全体を正しく理解してもらいたい一心で、表面的な中国近代化の在り方を抜本的に再検討する一助になることを願って本書を著した、ということである。そこには、ドイツをはじめとする西洋諸国の発展は決して物質文明に尽きるものではなく、実は、それを生み支える源泉となって

いるキリスト教文化が存在していること、とりわけ近年の西洋世界においては、後発国でありながら富国強兵を実現し、目覚ましい発展を遂げている自国ドイツの場合には、学校教育制度が全国的な規模で整い、教育立国精神の具体的な成果として国家発展の勇姿があるということを、是非とも中国の人々に理解させたかったのである。ここにドイツ人宣教師である原著者が、『大徳国学校論略』を執筆するに至った最大の動機があったといえる。

上記のような原著者の意図が込められた漢文の同書を、中国人の「王炳堃」という人物が校訂して出版を実現した。彼は、如何なる動機で校訂を引き受けたのか。実は、校訂者である彼自身の序文が、原著者の序文に次いで収められており、そこには次のように校訂に至った経緯が述べられている。

> 余(われ)、少(わか)くして西士の門に游び、粗(あらまし)西士の学を聞く。但(ただ)、書院の規模、学を為すの則例は、未だ之を前聞せず。比(このころ)牧師花先生と事を同じくすること数年、暇(いとま)に徳国学校一書を校す。其の制度の贍詳(せんしょう)、読書の次第を見るに、学術に大に裨(ひ)するところ有り。近来、徳国、蒸蒸日上、文徳武功、麟麟炳炳(きりんへいへい)にして、棫樸菁莪(よくぼくせいが)の盛なること自ずから由るところ有るを知る。学校は一国の盛衰に繋(つな)がる。(32)

校訂者の「王炳堃」という中国人は、幼少より中国在住の西洋人家庭に出入りし、西洋の学問文化について様々な情報を吸収しながら成長した。その彼が、長じて後、ドイツ人宣教師である原著者「花之安」(Ernst Faber) と出会い、彼の教会で数年間、伝道活動を共にした。その間に彼は、宣教師「花之安」が中国語の漢文で執筆した『大徳国学校論略』に接し、同書を校正する機会をえたという。この貴重な校訂作業を通して、中国人である「王炳堃」は、初めて西洋の強国ドイツの急速な発展の秘密、すなわち全ての近代化の基礎である学校教育制度の完備された実態を知るに及び、その結果、「学校は一国の盛衰に繋がる」との考えに立ち至った、というわけである。残念ながら、この中国人の校訂に至る意識の中には、原著者であるドイツ宣教師の本意、すなわちキリスト教を基盤に生み出されている西洋の文化や道徳についての関心や理解は、ほとんど認めることができない。

以上のように、中国で刊行された『大徳国学校論略』を巡っては、ドイツ人の原著者と中国人の校訂者との間に、近代化－西洋化を巡る認識の相違が認められる。だが、それは、異質な外来文化の伝達や受容に際して、送り手である西洋人と受け手である中国人との間

の、置かれた立場や問題意識の相違に基因する不可避的な懸隔、とみることができる。そのような東西両洋の間における認識の相違が、より顕著に認められるのは、中国での『大徳国学校論略』の刊行に際して収載されていた、もう一人の中国人の序文（同書に付されている順序からみれば、これが第一番目の序文である）の内容に窺い知ることができる。それは、「李善蘭」という人物によって書かれた、同書推薦の序文であった。はたして、この人物が、当時の清朝中国の社会で、どのような地位にあったかは全く不明である。だが、「アメリカ国の衛（ウエイ）公使を介して序を申しつけられた[33]」と記されている事実から窺えるごとく、彼がアメリカ合衆国の公使から推薦序文を依頼されるほどの人物であったこと、そして原著者と校訂者の序文に先立って彼の序文が同書の巻頭に掲載されたこと、等々の厳粛な事実から推察すると、彼は、当時の中国社会において相当の地位と名声を得ていた著名人とみてまちがいない。その彼が、序文の冒頭で、ドイツについて次のような注目すべき認識を示している。

> 徳、諸鄰国（りんこく）と戦いて、必ず大いに之に勝つ。それ徳の鄰（となり）は皆強国なり。而して徳の兵、必ず学校を出で、人人（ひとびと）義に向う。故に能くこれに勝つ。竊（ひそ）かに歎（たた）う、徳の兵を用うるは、何を以て甚だ我が中土聖人の教に合うや、と。教えざる民を以て戦う、是れ之を棄つると謂い、徳人其れ之を知る。[34]

鉄血宰相ビスマルク（Otto von Bismarck、１８１５－１８９８）率いる当時のドイツ帝国は、１８７０年に始まる普仏戦争でフランスに勝利し、ウイルヘルム一世（William Ⅰ,在位１８６１－１８８８)を戴いて第二帝国を建設し、西洋世界の中で一大強国に躍進していた。そのようなドイツ人の宣教師が執筆した『大徳国学校論略』に推薦の序文を寄せた中国人は、同書を通して、上昇ドイツ帝国の軍事的な強さの秘密が、近代化の人的条件を担う人材育成という教育にあることを知った。しかも、ドイツ教育の特徴を「義」によって立つ人間の育成にあると見て取るところに、中国人である彼の、ドイツ帝国およびその下での教育に対する儒教的な理解の仕方を窺い知ることができる。それ故に彼は、教育立国主義をもって隆盛する新興ドイツ帝国の勇姿は、中国儒教の聖人たちが説き示した理想社会と合致する理想である、と合点したのである。

このように、中国を代表する彼に、ドイツ帝国を事例として教育立国主義の理想を知らしめてくれたのは、まさに序文を依頼された中国在留のドイツ人宣教師「花之安」が著し

た『大徳国学校論略』という書物であった。とりわけ彼が、驚きをもって注目しているのは、ドイツ帝国が単に軍事面のみに努力を傾けているわけではなく、「地として学なきは無く、事として学に非ざるはなく、人として学ばざるは無し[35]」と述べているごとく、国民教育の普及徹底に努めている点であった。ドイツ全土に張り巡らされた多種多様な学校教育のネットワークの下に、「その国の公令により、八歳以上にして、学に入らざる者は、その父母を罪(とが)む。故に徳の毛を食し、徳の土を踐(ふ)めば、必ず徳の学に入る。[36]」というほどに徹底した国民皆学を実現しているドイツ帝国は、彼にとっては羨望をもった驚き以外の何物でもなかった。それ故に中国人である彼は、「将に人才輩出し、其の国必ず日に一日と盛んなるを見んとす[37]」という国家的な見地から、英国とのアヘン戦争によって蹂躙された屈辱と混乱と衰退の只中にあった中国社会において、漢書として出版された『大徳国学校論略』が広く中国社会で読まれることを切望し、敢えて推薦の序文を認めたもの、とみることができる。そのような彼の同書推薦の本意が、序文の最後に書かれた次のような記述に、よく表現されている。そこには、国家の盛衰は、ひとえに教育の如何に係っているという、伝統的な中国儒教の説く教育立国主義の精神を確かに読み取ることができる。

> 良材有ると雖も、学ばざれば則ち廃(すた)る。国墾(ひら)かざるの地無ければ、則ち米粟を食するに勝(た)えず。国学ばざるの人なければ、則ち賢才を用いるに勝(た)えず。国の盛衰は人に繋る。徳国学校の盛んなること此の如し。[38]

（二）翻刻『徳国学校論略』に込められた虎三郎の真意

日本の虎三郎が中国から入手にした漢書『大徳国学校論略』には、前述のような関係人物の序文が付されていた。同書は、中国で１８７３年に出版された。これを虎三郎が日本で翻刻したのが翌年のことであった。いったい中国の原書が、いつ、どのような径路で、日本の虎三郎の手に渡ったのか。全く不明である。ただ一つ、手がかりとなる史料がある。虎三郎が、郷里の長岡を去って上京したのは明治４年のこと。その年に彼は、実弟である雄七郎の高知赴任に同行した。そして翌五年には、東京に戻る。高知から大阪に向かう帰

路の洋上で出会った中国人に、彼は「舟将に浪花(なにわ)に達せんとして、清人某に別る」と題した、次のような漢詩を詠んでいる。

君は西海に生まれ吾は東海
両日舟を同じうするも亦好縁なり
是れより悠悠(ゆうゆう)手を分つて去らば
知らず再会何れの年に在るかを[39]

この漢詩は、漢学に造詣の深かった虎三郎が、清人、すなわち中国人と出会って意気投合し、交友を結んだことを裏付ける資料である。帰京後、彼は、この中国人との関係を介して、直接的にか間接的にか、『大徳国学校論略』を入手したのではないか、と推察できる。上記の漢詩が詠まれたのが明治５年（１８７２）のこと。その翌年の１８７３年に、漢書『大徳国学校論略』が中国で出版された。そして日本の虎三郎が、同書を『徳国学校論略』と題して日本に翻刻紹介したのが、明治７年（１８７４）１０月のことであった。虎三郎が翻刻した『徳国学校論略』の刊行は、彼が前述の漢詩を詠んでから二年後で、漢文の原著書『大徳国学校論略』が中国で出版された翌年のことであった。したがって、中国での原著書の出版と日本での翻刻との時間的な間隔は、僅かに一年であった。この事実から考えると、虎三郎は、中国で漢書『大徳国学校論略』が刊行された直後に同書を入手し、病身に鞭打って急ぎ訓点を施し、上下二冊本として日本で翻刊したものと推察される。

ところで、日本版の巻頭には、新たに虎三郎自身の序文「翻刊徳国学校論略序」が収載され、そこに漢書『大徳国学校論略』を翻刊するに至った彼自身の意図が明記されている。まず、序文の冒頭に、彼は次のように記している。

地民を生じ、民聚(あつま)りて一大団と為(な)る。是れを国と謂う。民は乃(すなわ)ち国の体なり。故に民強ければ則ち国強く、民弱ければ則ち国弱し。国の強弱は、民の強弱に係る。何をか民の強と謂い、何をか民の弱と謂う。其の能く学に励み業に勉め、勇有りて方を知る者、之れを強と謂う。其の能く然らざる者は、則ち弱なるのみ。民にして果たして能く学に励み業に勉め、勇あって方を知れば、其の数、寡なりと雖も、国以て強と為(な)るを得。若し能く然らざれば、則ち其の数多しと雖も、国、弱なるを免れず。[40]

維新当時の日本における最大の課題は、如何にして近代統一国家を形成し、その下での富国強兵・殖産興業を実現するか、という幕末期以来のそれであった。それ故に維新時には、政府主導の近代化政策が矢継ぎ早に打ち出された。紆余曲折に満ちた維新時における日本近代化の進捗状況の下で、虎三郎は、国家を構成している「民」に着目し、その「民の在り方」によって国家の強弱が決まると考えた。それ故、彼は、「強民強国の基礎」としての国民教育こそが、「民の在り方」を決定する最も緊要な国家的事業であると考え、教育立国主義を展開するわけである。この教育立国主義という彼の考え方は、彼が２０代の青年期に学んだ象山塾での学習成果である論文「興学私議[41]」に示されていた。さらには、そのような彼の考え方は、戊辰戦後の郷土長岡の復興政策に具体化された史実「米百俵」の基本精神ともなった。したがって、近代化途上の日本に『徳国学校論略』を翻刻紹介しようとした彼の意図は、「国の強弱は民の強弱に係る」という基本認識に支えられたものであり、それは「興学私議」以来、彼の思想的信念となっていた教育立国主義を日本社会に実現するという一点にあったとみてよい。

上述のような日本近代化の推進過程における虎三郎の思想的な位置は、同時代を共に生きて親交の深かった福沢諭吉の説く「一身独立して一国独立す」という思想と相通じるものがあった。虎三郎の思想は、先にみた漢書『大徳国学校論略』に付された関係三者の序文からみれば、同書の冒頭に付された推薦序文の執筆者、すなわち中国知識人「李善蘭」という人物の立場に最も近いものであった。だが、「李善蘭」が、中国という旧態依然とした清朝中国の窓から西洋の強国ドイツを眺めて位置づけたのに反して、日本人である虎三郎の場合は、ドイツと中国における近代化を相対化し、アヘン戦争の顛末に象徴されるような「威を八溟(はちめい)に展(の)ぶ」る覇権主義の欧米諸国と、「萎爾(いじ)して振るわず、毎に外侮(がいぶ)に苦しむ」という萎縮した中国との間に認められる歴然とした懸隔の根本原因を、国家の近代化政策の全的基礎である人材育成という教育的な観点から比較考察して[42]、両国にみられる近代化の成功と失敗に関する歴史的事例から日本が学ぶべきものは何か、を冷静に探究しようとしていた。この点において、中国人の「李善蘭」と日本人の虎三郎との『徳国学校論略』に関する理解の仕方は、大きく異なっていた。虎三郎は、欧米人と中国人とを比較して、たとえ人種は異なっても、同じ人間であることに変わりないはずの両国人民の決定的な差異を、次のように分析している。

惟(ただ)欧米各国の民、率(おおむね)皆な能く学に励み業に勉め、勇有りて方を知り、而して支那の

民、則ち然る能わざるに由るのみ。（中略）亦、惟欧米各国、民を教うるの具と其の法とを備え且つ悉さざる莫くして、支那は則ち然る能わざるに由るのみ。[43]

彼は、以上のような比較分析の結果、今後の日本は欧米各国の制度に倣って「其の民を啓迪し、弱を変じて強となし、以て其の国を強うせんと欲する者は、欧米各国の為す所を倣わずして、又、何所にか求めん[44]」と、欧米を模範とする近代化の必要性を説いた。だが彼は、その際に、欧米といっても様々な国があり教育があり、自ずとそこには国風や民俗の相違などによる差異があることを忘れてはならない、という。それ故に彼は、まずもって欧米各国の教育制度を比較検討して異同を明らかにし、その上で受容する日本側の現実的な諸条件を斟酌して、真に適切妥当な政策や制度を主体的に選択し受容すべきであることを説いた。

翻って維新後における日本の教育近代化政策の実際をみるに、早々に西洋のオランダ学制やフランス学制などが紹介され、明治５年（１８７２）にはフランス学制をモデルとした日本の近代学校制度の発足を告げる学校教育法「学制」が発布されていた[45]。虎三郎翻刻の『徳国学校論略』が紹介される前にも、ドイツの教育制度に関する断片的な情報は、若干ではあるがもたらされていた[46]。しかしながら、ドイツの学校制度に関する全体的かつ統一的な情報はなきに等しかった。それ故に彼は、ドイツを中心に西洋先進国の学校体系を説き示した漢書『大徳国学校論略』を、教育近代化過程にある日本社会に翻刻紹介することは大いに意味がある、と主張したわけである。そのような虎三郎の翻刊に込められた意図の底流には、漢書『大徳国学校論略』に付された推薦序文の執筆者「李善蘭」の場合に共通する、当時の新興上昇国ドイツに対する次のような認識があり、そこには日本における教育立国主義による近代国家の建設という理想が重ね合わせられていたとみてよい。

徳国は即ち独乙にして、今の独乙は則ち普国なり。普国は旧独乙の一部たるのみ。輓近に迨んで、其の民益学に励み業に勉め、勇有りて方を知る。国、是れに由りて駸々として日に昌んなり。力を蓄え威を養い、機を見て動き、勢い河を決するが如し。東に墺を挫き、南に仏を破り、遂に独乙諸部を統括す。英魯の雄を以てして、猶且つ之れを畏る。蓋し其の国、学校最も盛んにして、教育最も行われ、欧米各国の推す所と為らん。日已に久し。故に其の民愈強くして、国愈強きの効此の如し。[47]

たしかに当時のドイツ帝国は、ヨーロッパ社会において「自然成長的」な近代化を遂げた先進国のイギリスやフランスに比べれば、後から「目的意識的」な近代化を推進した後発国であった。したがって、近代化の仕方も英仏両国の場合とは異なり、国家が上から強力に推し進める「国策としての近代化」であった。だが、虎三郎にとっては、そのようなドイツの「富国強兵」を国是とした短期間における効率的な近代化の成功事例こそが、まさに極東アジアの非西洋文化圏にあって近代化をめざす後発国日本の適切妥当なモデルとして映ったにちがいない。それ故、すでに教育近代化の推進過程にあった日本にオランダ学制やフランス学制が紹介されていたのを承知の上で、彼は、「民を強くし国を強くするの基礎を定むるに於て万一の補有らんと欲すとしかいう[48]」と述べて、教育を基礎として富国強兵を実現したドイツ学制こそが、日本にとっては最も有益であると考え、『徳国学校論略』を翻刊するに至ったものとみてよい。

（三）翻刻『徳国学校論略』の記述内容とその特徴

以上、『徳国学校論略』に関わった４人の人物－原著者のドイツ人宣教師、中国人の校訂者と推薦者、そして日本に翻刻紹介した虎三郎－が、同書に込めた意図を比較検討してきた。それでは、肝心の『徳国学校論略』の内容は、はたして、どのようなもであったのか。虎三郎が、１８７３年（明治７）に日本で翻刊した『徳国学校論略』は、上下二冊を一巻に纏めた和綴本５２丁（洋装本で１０４頁に相当）である。その内容は、１８７０年前後におけるドイツ帝国の学校教育を中心とした教育文化の制度的な内容と特徴とが、アヘン戦争後の清朝中国における教育文化の現状との対比において、包括的に論述されているものである。近代化の後進国でありながら先進国である英仏を凌ぐ勢いで発展するドイツ帝国を支える教育文化の制度的な全体像が、清朝中国の教育現状の問題点を浮き彫りにする形で叙述されている。具体的にはグレード別、コース別に組織化されたドイツの学校階梯の内容と文明開化を担う学校以外の各種の教育文化機関に関する情報とが紹介されていたのである。上下二冊の内容（「徳国学校論略目録」）は次の通りである（カッコ内の漢数字は、筆者算定による本文中での頁数であるが、和装本の一丁を洋装本の二頁として

算出した)。

□上冊の内容構成

第一章に相当する（一）には、「郷塾（１．５頁)」「郡学院（１．５頁)」「実学院（３．５頁)」「仕学院（２頁)」「太学院（経学　法学　智学　医学）（１８頁)」の「紹介。次の（二）には、「技芸院（５頁)」「格物院（六頁)」「船政院（２頁)」「武学院（論略　兵制　営規郵務）（９．５頁)」が、そして（三）には、「通商院（１．５頁)」が紹介されていた。

□下冊の内容構成

引き続き「農政院（６頁)」「丹青院（１．５頁)」「律楽院（四頁)」「師道院（４．５頁)」「宣道院（２頁)」の紹介。さらに（四）には「女学（５頁)」が、（五）には「訓瞽目院（３．５頁)」「訓聾瘖院（１．５頁)」「訓孤子院（１．５頁)」「廃疾院（１頁)」「訓罪童院（１頁)」が、（六）には「文会（１頁)」「夜学（１頁)「礼拝堂（５頁)」「印書会（１頁)」が、最後の（七）には各種の統計的資料－「各国太学院総数（０．５頁)」「徳国書院総数（掌教総数　生徒総数　花旗書院総数）（２．５頁)」「新聞紙（３頁)」「書籍源流（２．５頁)」「徳国新撰書籍数（３頁)」「徳国書籍出口入口表（０．５頁)」「英京新刻書籍表（０．５頁)」などが一覧表にまとめられて収録されていた。

以上が、『徳国学校論略』の内容を構成する項目の全体である。次に、上下各巻に収録された各項目の具体的な記述内容と、そこに認められる特徴などについてみていくこととする。

（１）翻刻『徳国学校論略』「上冊」の内容と特徴

まず、（一）で取り上げられている教育機関（学校）の説明内容についてみると、最初の「郷塾」とは、国民皆学の基本方針の下で基礎的な初等教育を実施する小学校である。特に本書において同校は、国家が民間童蒙の初等教育を重視して、特別に「貧家子弟」のための教育機関として民間に設置した教育施設であると強調されている。その学校では、

教師１名が１００名以内の生徒を担任して、男女の別なく、初めに「幼学問答」「聖経章節撮要」「聖経来歴撮要」「本国地理説略」「数学要略」「神詩要略」の６科目を教え授ける[49]。この学校の特徴は、徹底した能力主義と競争主義の原理で貫かれている点にある。年１回の学年末試験（歳考）では、学科と道徳の両面に亘る厳格な試験が実施され、その合否によって進級か落第かが決定される。最上級（首班）に進級するには、およそ２年を要する。したがって、同校を卒業することは、「諸生学満の年に至り、未だ首班に升上する能わざる者は、院を出でて芸に就くを得ず。罰として仍(なお)院内に留まり、再び多年学ぶ。[50]」と、実に厳格な進級制度である。なお、教師を統括するのは最上級（首班）を担当する教師であり、学校には教師の他に牧師１名が配置されていて、教師と生徒の全体を監督している。また、学校の規則も、次に述べるように実に厳しい。すなわち、学校は毎日、全生徒を集めて朝礼をする。教師が教室に入室したときには、生徒は全員、起立して敬礼し、そのとき教室にいない生徒は処罰される（先生入館するに迨(およ)び、生徒未だ至らざる者有るをみれば之れを罰す。先生館に到れば、各起立し敬を示すを要す[51]」）。生徒は、授業中に喧嘩をして騒いだり、自分の席を離れたりしてはいけない。もし質問があれば、手を高く挙げて教師に知らせる。起立と着席は礼儀正しく行う。帽子や衣服が不潔で、また動作が不作法である生徒は、他の生徒に不快感を与える故に、教室から外に出す。さらに放課後、帰宅したら、夜は必ず学校で昼間勉強したことを全部復習すること。また生徒は、道で先生に出会ったときには、必ず前に行って挨拶をすること。

以上のように、まさしく軍隊生活を彷彿させるほどに、生徒は学校教師の厳格な管理統率の下で厳しく教育されている様子が具体的に詳述されている。なお、教師は生徒を罰するときに、生命の危険があるから頭を打ってはいけない。また、この「郷塾」において特徴的なことは、毎週、水曜日と土曜日の２日は、昼に帰宅して、午後の半日は家の仕事の手伝いをするとしていることである。ただし、その場合、出来ない生徒は居残り勉強１時間を課してから帰宅させる。また、地域社会の責任者の審査を経て、貧困家庭であることが確認されれば、授業料免除の措置が執られる。特に貧困の甚だしい家庭の場合は、１４歳以上の生徒に限って、「其の半日家に在りて以て父母を助くるを許す」という、後に明治日本に導入される「半日学校制度」も実施されていた[52]。

次の「郡学院」は、「郷塾」の上に位置する上級の学校（日本の昭和戦前における高等小学校）と考えられる教育機関である。なお、この学校の授業料は非常に高額で、その収入は教師の給与に充当される。各クラスとも専任の担任がおり、その他に絵画、唱音、幾

何、格物、重学、歴史、理学などの各専門科目を教える教師がいる。卒業試験に合格した生徒の多くは就職するが、さらに上級の「実学院」あるいは「技芸院」に進学するものもいる。

以上の諸学校は、義務教育の初等教育機関である。これらの学校階梯を経て進学するのが、中等教育機関であり、その一つに「実学院」がある。この学校は、さらに「上院」と「下院」の二種に分かれており、共に「実学」（実業に就くための教育）を主とする学校であるという点では、次の「仕学院」と同様であった。「下院」の方は、ラテン語がない点では「上院」と異なり、さらに「上院」にはギリシャ語がないという点では次の「仕学院」と異なっている。「下院」の卒業生は、最高学府である「太学院」には進めず、「技芸院」など（二）の実業系の学校にしか入学できない。そのような「下院」とは異なって、「上院」の卒業生は、国家の最高学府である「太学院」に進学することができる。しかもその場合には、兵役期間も「下院」の出身者が３年間であるのに対して１年間という優遇措置が講じられていた。

実例として、ある「上実学院」の学校案内書をみると、４４０名の生徒は能力別に初級（末班）から最上級（首班）までの１３班にクラス分けされている。生徒は試験によって１年に１回、進級でき、したがって卒業までは最短でも１３年を要する。中には、１４、５年かかって卒業する生徒もいる。授業は最低でも週２４時間、上級に進むにつれて授業時間は増え、最長３３時間に及ぶ。また、生徒には帰宅後に週４０時間の家庭学習が義務付けられている。教師は２０名で、各教師は週に２０時間を越えて授業を担当してはならない。何故ならば、教師は授業の予習（準備）をしなければならず、また、生徒の作文を家に持ち帰って添削するなどの仕事があるからである。教師は優秀で、中国の科挙試験の合格者である「進士」に相当する人がほとんどである。

「実学院」を卒業しても直接には官吏になれない。だが、次の「仕学院」は、官吏養成を目的とした学校であり、ラテン語とギリシャ語の語学を最重視した教育を施す学校である。この学校には、１８歳以上の者が入学し、１人の教師は２、３科目しか教えない。生徒は、試験の成績によって「上中下」の３級に分けられる。試験は、中国の市や県で行われているような試験（考県府試）とは異なり、上級役人の臨席の下で厳格に実施されるので、決して不正はみられない。試験に落第した生徒は、もう１年、原級に留まって勉強し、再度その試験に臨むことになる。だが、これにも落第すれば、放学処分を受ける。この学校は、希望によっては「中級」からでも卒業できる。最終の卒業試験の合格者は、卒業証

書を得て最高学府の「太学院」に進学することができる。しかし、そうでない生徒は、後に述べる「師道院］［格物院」「武学院」などの各専門学校に進むことになる。以上のような「実学院」は、各県に数校しかない。その理由は、多額の学費を要する学校だからである。

（一）の最後の「太学院（経学　法学　智学　医学）」は、「国中の才識をそなえ兼て優ぐる」ものを集めた正に国家の最高学府であり、ここに入学できるのは「実学院」の「上院」と「仕学院」の二つの学校の成績優秀な生徒に限られる。「太学院」には、各種の専門書籍を初め、学問に必要な一切の「器具」が完備されており、専門とする学問分野によって四つの分野に分かれている。第一に「経学」。ここは新旧聖書を中心としたキリスト教学の研究が中心であり、卒業後は牧師になることができる。第二は「法学」。これは、皇帝や教皇、教会の関係史を専門とする「教事」と古今の政治や法律を探求する「政事」からなっている。そして第三が「智学」である。この学校は、「学話」（言語学）「性理学」「霊魂説」「格物学」「上帝妙話」「行為」「如何入妙之法」「智学名家」の８学科で構成されており、卒業後は「仕学院」あるいは「太学院」の教師になることができる。最後が「医学」である。以上のような４つの専門分野からなる「太学院」は、それぞれの専門分野における国家最高の人材を育成する国家的な研究教育機関といえる学校である。

次に（二）の各学校についてみると、まず初めの理工学関係の各種専門の教育を施す「技芸院」は、先の「実学院」を卒業して商店（坊肆）や各種の職人（諸工）になることを目指すものが技芸の理論（「其理蘊」）を窮めるために入学して学ぶ学校である。まず、説明の冒頭に「泰西の技芸は中国と同じからず[53]」と述べ、等しく学校の名称は「技芸院」といっても、西洋におけるそれと中国のそれとでは、本質的に学校の内容や性格が異なる。すなわち西洋の「技芸院」は、中国のように実社会の中での徒弟教育によって体得されるような「技芸」の教育とは異なって、「技芸の理と為す甚だ深き[54]」が故に、学校でなければ習得できない教育内容である。例えば「火船電報」は単なる技術使用に関する方法学ではなく、それを支えている学問（幾何学、重学、化学、等々）の理解を重視した教育内容となっている。そのように西洋の近代諸科学に裏付けらた技芸教育を実施するドイツの「技芸院」の教育内容については、金類課、陶煉課、石作課、営造課など、学校を構成する１２の学科（課）をあげて詳細に紹介している[55]。西洋の「技芸」は日進月歩であり、それは各人の「神技」のような「技芸」の探求の結果である。それ故に西洋社会では、中国とは違って、物の質が良く値段は安い。ここにおいて、西洋（ドイツ）の優れた「技

芸」を生み出した「西洋技芸」の内容と、それを模倣し導入しようとする東洋（中国）の「技芸」との決定的な相違が端的に指摘されている。

次の「格物院」は、上記のような内容と性格の「技芸院」と密接に関係する学校である。同校は、その校名のごとくに「格物」、即ち「物質の分析」を専門的に教育する学校である。それ故、同校では化学・力学を中心とする物理、そして数学、それも特に幾何を重視した内容の教育が施される。各種の石類、草木や昆虫類などの生物、さらには天文などの分析や観察実験という教育内容が、極めて具体的に説明されている。

また、商船や軍艦の航海士を育成する「船政院」は、語学、数学、天文学、地理学などを重視した教育の内容である。さらに、近代の集団戦争を勝ち抜ける優秀な軍人（「勝を制するの道、将謀を貴び兵勇を貴ぶ[56]」）を育成する「武学院」の教育に関しては、これまた中国のそれとの対比において「兵制」「営規」「郵務」の３点から多くの紙幅を割いて詳述されている。特に、将官にまで出世するには、中国では一兵卒からでも軍功によってなれるが、ドイツでは早くから士官学校に入って軍人としての専門教育を受けなければなれない制度であることが強調されている。

次に（三）の初めの「通商院」は、貿易を含めた商業教育の学校である。中国社会では店に奉公して習練を積めば立派な商人になれる。だが、西洋社会では、学校を出なければなれないと、中国の前近代的な商人教育との対比の上で、植民地化の活発な時代に世界的規模での商業経済活動に従事していく上で必要な、専門的な知識や技術を授ける商業学校の教育内容が紹介されている。以上が上冊に収録された各学校の内容と特徴についての記述である。

（２）翻刻『徳国学校論略』「下冊」の内容と特徴

「下冊」の最初は、「上冊」の（三）の続きの「農政院」に関する記述である。農業後継者の育成を目的とした農学校については、「農は国の本為(た)り」あるいは「農を富国裕民の一助と為(な)す」という観点から[57]、多くの紙数が割かれて詳述されている。特に後段では、食肉乳牛に関する各種の動物の育成、それに必要な牧草や飼料、養蚕やブドウ酒、穀物や野菜、花木の栽培や植林、農具や農土など、実に広範囲なドイツ農業の領域全体について具体的に紹介されている。ドイツ人である原著者が、中国におけるそれらとの対比を

意識して叙述したが故と考えられる。この農業教育においては、「化学」や「格物」に代表される基礎科学が必須学科として重視されていることを強調している点に大きな特徴が認められる。

次の「丹青院」という学校は美術学校を意味し、また「律楽院」は音楽学校を指し、美術や音楽がドイツ社会の精神文化に大きく貢献していることを叙述している。続く「師道院」とは、「郷塾」「郡学院」「実学院」の教師を養成する師範学校のことである。特に教師養成を目的とする「師道院」については、その教育内容が具体的かつ詳細に紹介されている。また、「宣道院」とは、外国に出てキリスト教を広める宣教師を養成する学校である。

（四）は「女学院」、すなわち女学校についてである。ここでは、「女学は之を宜しく講ずべき」であること、即ち女性が就学して学問を修めることの必要性が、学問能力において男女は平等であるとの大原則（「婦女は霊魂を具有し、才能は男子と異なる無し」[58]）に立って、次の３点から論述されている。①女性は、母として子女の家庭教育を担う上で学問が必要であること（「丈夫は在家に在る時少なく、婦人は家に在る時多く、子女を訓（おし）えるは、女は母の功多し」[59]）、②婦女の生き甲斐は酒食のみにあるのではなく、限りない道理があることを知ることが大切であること（「婦女書を知らずして、只酒食是を為すことのみを是れ議すれば、則ち酒食の外に、豈尚（あになお）無窮の道理有るを知らんや」[60]）、それ故に女性は天賦の才能（「天人に賦したる霊明の性」[61]）に目覚めるべきであること、③たとえ夫が博学で立派な人物であっても、婦人が無学であれば、家事万端を整理することはできないこと（「丈夫（じょうぶ）博学なる文儒たるも、婦人学ばずして粗鄙（そひ）なれば、何の趣（おもむき）か之れ有らん。家中の諸事、惟（ただ）婦これを幹（な）すのみなれば、学ばずして何ぞ能く操置するに宜しきを得ん」[62]）。以上の３点から、女子教育の重要かつ不可欠であることが説き示されている。ドイツ人宣教師である原著者が、男女平等を基本とする女子教育観に立脚して中国の女子教育の現状をみたとき、男女が教育不平等にあるという中国社会の現実こそは問題と映った。しかしながら、そのような中国でも、古代社会は男尊女卑ではなかったと説く。すなわち原著者は、周代官制を記録した『周礼』を引きながら、古代中国の教育世界では「蓋（けだし）古は女学、男学と並び挙ぐ[63]」という男女平等の社会であったことを指摘する。だが、その後の中国社会は、「女学は聖人の言う所を経（ふ）るに非ず[64]」と説く儒教思想、あるいは「古来才女多く淫（いん）を蹈（ふ）む[65]」とみる差別的因習の影響によって、今日では「今の人女を養うに、書を読み字を認（したた）むるを教えざる多し[66]」という由々しき状況にある

と分析する。ドイツ人宣教師である原著者は、中国社会における女子教育の歴史と現状を鋭く分析した後、自国のドイツでは女子教育が男子と平等であること、それ故に女学校が整備されていて、本人が望めば能力次第では国家の最高学府である「太学院」にまでも進学できる開かれた社会であることを紹介している。

次の「訓瞽院」は盲学校、そして「訓聾瘖院」は聾唖学校、また「訓孤子院」は両親のいない児童に義務教育を保証する学校である。ドイツでは、社会の中で各種のハンディキャップを背負って生きている弱者の教育にも意を用い、そのための学校教育が整っていることを紹介している。そして「廃疾院」とは、「凡そ生まれて痴呆なる者は、送りて院中に入れ、医生細く其の病を致すの由を察し、法を設けて之れを治す(67)」という教育的な医療機関のことである。このようなドイツにおける弱者や障害者のために整備された教育施設を支えている思想は、人間は「一日の生有りて、亦人一日の分を尽す(68)」というキリスト教の教えであるという。続く「訓罪童院」とは、１８歳未満の犯罪少年を収容して、更生教育を行う教育施設である。その施設の教育内容は、国民の基礎教育を担う機関である「郷塾」と同じで、自立に必要な「技芸貿易」などに関する教育も行われる。このような更正教育によって、「百人院に入り、約九十、異日良民と為るべし(69)」と述べられており、如何に「訓罪童院」の役割が重要であるかが説かれている。それ故、原著者が所属する教会もまた、「今、香港天主教に在りても、亦此の挙有り、特に華民の為に立つ(70)」と記されている通り、同様な更正教育の施設を中国香港に設けているという。

次の「文会」とは、いわば文学会または文芸協会と称すべきもので、西洋社会には学問の専門分野に応じて「理学会」や「格致会」など、各種の学術交流団体が存在することを紹介している。さらに「夜学」とは、国民の初等教育機関である「郷塾」を卒業した後、家が貧しいために「実学院］などの上級学校に進学できない子弟が、昼間は働きながら夜間に学べる夜間学校を意味する。続く「礼拝堂」とはキリスト教会のことである。原著者をはじめとする多くの宣教師が、今、西洋の異国から中国に来りて教会を設立し、伝道活動に励むのは、何故か。中国にキリスト教が普及して、中国人が教会に通うようになること、その結果、キリストの子としての中国人が、旧弊を打破して魂が救済され、一郷一村が隆盛すること、を願ってのことであるとして、次のように述べている。

今西士中土に来りて、礼拝堂を建立し、亦斯の民を陶淑し、上帝に昭事し、身を保ち

霊を救うの道を知らしめんと欲す。吾願わくば華人早日信奉して、其の積習を去り、同じく上帝の民、大君の子となり、将に風俗の隆んなることを見んとす。一郷一邑に成り、教化の隆んなること、溥海の内外に達するを。余将に目を拭いて之を俟たん。(71)

次の「印書会」とは、書籍を印刷出版する団体の協会であり、これによて西洋各国では善書を廉価で読者に供給できるシステムを実現していると説明している。

以上が、『徳国学校論略』の「下冊」に収められた、西洋のドイツ社会における教育文化に関する教育機関の紹介内容である。

なお、「下冊」の巻末には、欧米先進諸国における教育文化関係の施設に関する様々な統計資料が収録されている。第一に「各国太学院総数」、これはイギリス、フランス、イタリア、ロシア、ベルギー、ハンガリーにおける大学数・教員数・学生数の紹介である。第二が「徳国書院数　掌教総数　生徒総数」で、これは先にみたドイツの諸学校（「郷塾」「郡学院」「実学院」「技芸院」「大仕学院」「小仕学院」「太学院」「格物院」）の現状を、アメリカ（美国）の場合と共に紹介したものであり、当時のドイツやアメリカでは、如何に学校教育が発達し国内にネットワーク化されているかを物語る統計数値が示されている。そして第三には新聞の種類と発行部数（「新聞紙」）が、第四には書籍の蔵書数と発行数（「書籍源流」「徳国新撰書籍数」「徳国書籍出口入口表」「英京新刻書籍表」）等々が紹介されている。

おわりに

以上、虎三郎が、維新後間もない明治初期の日本社会に翻刊紹介した、漢書『徳国学校論略』の内容とその特徴をみてきた。同書の刊行に関わるドイツ、中国、そして日本という三ヶ国の人物（東西両洋の人物）が、同書の刊行に込めた意図を比較検討し、さらには同書自体の内容とその特徴とを若干の考察を交えながら分析してきた。その結果、次のような事実と特徴を指摘することができるであろう。

まず第一にいえることは、ドイツ人の原著者が、自序において執筆の動機と意図を明記

している通り、同書は単にドイツ人が自国の教育文化について記述し紹介した書物ではないということである。同書は、欧米先進諸国が植民地獲得競争に凌ぎを削る１９世紀後半の、弱肉強食を基本原理とする世界情勢の中で、病める東洋の大国とも評すべき悲惨な状況にあった中国社会、その社会で進行する近代化、西洋化の有する問題点を指摘すべく執筆された書物である。すなわち、中国社会へのキリスト教伝道に生涯を賭したドイツ人宣教師が、東洋の後進国である中国社会に長く身を置き、そこでの直接的な生活体験を通じて中国社会の現実を観察し分析して、アヘン戦争後の西洋化を内実とする近代化推進の過程に様々な問題を発見し、それを中国人自身に認識させ克服させたいと願う博愛精神をもって執筆した書物であった。かかる同書の内容は、教育立国主義という教育的視座からドイツと中国との比較近代化論の書物であった。そこには宣教師である原著者の、中国人民に対する救済的な祈りが込められていた。それ故に同書は、西洋教育文化の単なる紹介書ではなく、また、中国社会の偏狭な西洋認識と皮相的な西洋化の問題性を批判することを目的とした意地悪の書物でも決してなかった。原著者は、アヘン戦争後における中国社会が、依然として強固な中華意識を墨守したままで中体西用の洋務運動を展開している現実を問題とした。すなわち、西洋近代社会の単なる果実としての「西洋芸術」（西洋科学技術）のみの受容に囚われた、安易で性急な近代化を推進する中国との対比において、ドイツに象徴される西洋文明社会の実像を知らしめるべく、学校教育の制度と実態を主とした教育文化の全体像を紹介しているのである。そのような原著者の意図が、本書を構成している各項目の叙述内容には一貫している。すなわち同書は、「西洋芸術」はそれを生み支えている「西洋文化」の成果（果実）であって、それ故に両者は一体不可分の関係にあるという原著者の主張が具体化され書物である。この点にこそ、同書の第一の特徴を認めることができる。

以上のことと関連するが、第二に指摘できることは、原著名が『大徳国学校論略』となってはいるが、実際の内容は副題に「一名西国学校」とあるごとく、同書の内容は、単にドイツの学校制度に限定されたものでなく、原著者の母国ドイツは西洋先進諸国の代表的事例として扱われており、しかも学校のみを取り上げて紹介しているものでもない。すでにみてきた通り、同書では、学校の制度と実態の他にも、キリスト教をベースとした様々な教育文化的な機関や施設が、文明開化あるいは富国強兵の近代社会を生み支えている秘密として描写されている。その意味において同書は、教育学者の手になる教育書という偏狭な枠組や内容を超えた広がりと深さをもった「教育文化書」と評することができる。こ

のことは、原著者が博士の学位を持つ教養豊かな学者的宣教師であったこと、しかも東洋の異国である中国に長く在住して生活と言語に精通していたこと、等々と決して無関係ではありえない。そこには、ドイツと中国という二国間における単なる学校教育の比較というパラダイムを超えて、東洋と西洋という異質な世界観の下での比較文化史的な視坐と洞察とが窺い知れる。この点を、本書のもつ第二の特徴としてあげることができる。

以上のような原著者の執筆の意図と内容とを、はたして中国人である校訂者と推薦者、そして日本へ翻刊した虎三郎は、如何に理解し受け止めて、西洋をモデルとした近代化の推進過程にある自国に紹介しようとしたのか。この点に関しては、同書の冒頭に掲げられた各人の序文を比較分析することによって明らかにすることができた。そこに共通に認知されることは、中国でも日本でも、共に原著者の意図とは異なった理解や認識の下に本書を受け止めて共感し、近代化の後発国である自国の社会に紹介しようとした事実である。具体的に指摘するならば、ドイツ国家が、英仏両国に比べて遥かに遅れて近代国家の建設に着手したにもかかわらず、先進諸国の経験と成果を効率的に摂取し、極めて短期間の内に近代化を達成したこと、しかも今や先発の英仏両国を凌駕するほどに富国強兵を実現した近代国家となっていること、等々に関する成功事例としてのドイツ近代化の厳粛な事実への刮目である。しかも、重要なことは、近代化成功の秘密が学校教育を中心とした教育文化の普及と発達にあるという基本認識。これらは、日中双方のドイツ理解に認められる共通点である。新興国ドイツからみれば、英仏両国は追い着き追い越す目標の先進国であり、近代化のモデルであった。だが、翻って中国や日本にとてみれば、西洋の後進国であるドイツ自体が近代化のモデルとすべき理想国家と映ったわけである。近代化モデルという場合、特にドイツの事例は、後発型近代化の成功モデルとしてであった。「自然成長的近代化」の英仏両国をモデルとするよりも、同じ後進国として「目的意識的近代化」を成し遂げたドイツの方が、遥かに適切な近代化モデルであると認識された、ということである。だが、そのような中国人の校訂者や推薦者、あるいは日本の虎三郎に認められる近代化モデルの理解は、ドイツ人である原著者の主張、すなわち「西洋芸術」はそれを生み支えている「西洋文化」の成果（果実）であり、両者は一体不可分の関係にあるという基本認識を、原著者の側に立って理解しようとするものではなかった。

そのような見方を、従来の歴史学は、後進国における後進的な近代化論の特徴として否定的に捉えてきた。だが、そような理解や認識の事実をもって、単純に東洋人（日中両国人）を劣等視することはできない。従来の歴史学では、近代化を西洋化に一元化して捉え

ようとする西洋メルクマール一辺倒の危険性があり、異文化を理解し受容する側の条件、すなわち何をどのように理解し受容するかという、受容する側の主体性が捨象されてしまうという歴史認識の誤謬に陥る危険性があったことを指摘しておかなければならない。以上のことが、結論の第三である。

以上のような歴史的意味を持つ『大徳国学校論略』を、東洋と西洋という二分的な世界観の図式で捉えれば、日中共に西洋を西洋のままでは理解しえなかったこと、特に西洋文明を生み出すキリスト教の源流に溯って把捉できなかったことは確かである。しかしながら、日中とはいっても、中国人の校訂者や推薦者と、日本の虎三郎の場合とでは、認識の相違が認められる。すなわち虎三郎の場合は、西洋人であるドイツ人宣教師が観察し分析したアヘン戦争後の中国近代化過程の孕む問題性を、あたかも我が日本の現状であるかのごとくに、正に「他山の石」として受け止めていた、ということである。それ故に彼は、日本の近代化に関する成功事例（ドイツ）と失敗事例（中国）との両方を同時に示唆してくれる書物として『大徳国学校論略』を捉え、「我が意を得たり」との共感的理解をもって近代化途上の日本に翻刊し紹介することができたといえるであろう。

しかしながら、明治初期に国策として推進されていた日本の近代化は、そのような虎三郎の真意に沿うような方向や内容のものでは決してなかった。彼にとってみれば、日本近代化に、中国の場合と全く同質の問題点が看て取れたとみてよい。少なくとも虎三郎自身には、そう認識されていた。それ故にこそ、彼は、死期迫る病身に鞭打って、同書を日本社会に急ぎ翻刊し紹介しようとしたわけである。

虎三郎が、『徳国学校論略』を翻刊した明治初期の日本における近代化モデルは、フランスでありアメリカであった。だが、彼の目には、そのような日本の近代化推進の在り方は、現実条件の相違を全く無視した、極めて矛盾に満ちたものと映った。日本社会の置かれた内外的な現実的諸条件を冷静に認識するとき、ドイツ型の近代化モデルこそが適切妥当な日本近代化の在り方と考えられた。ドイツの近代化においては、近代化の具体的な政策の実施において、近代化の基礎的条件である国民教育が何よりも重視されていたこと、そして、役人、教師、牧師、宣教師、軍人、商人、職人などの職業人が、それぞれに整備された学校教育を享受して、基礎的あるいは専門的な知識技術を習得して職務に精励していたこと、つまりドイツ社会は学校教育の普及徹底を基礎として国家の近代化を達成していることを、彼に痛感させてくれたのは、他ならぬ漢書の『大徳国学校論略』という一冊の書物であった。それ故に、同書を日本に翻刻紹介することは、国家的な意義があり、国

家的レヴェルでの学問の大成を期した虎三郎にとっては、是非とも成し遂げなければならない己の責務として認識されたと考えられる。

だが、そのような彼の労苦も、当時の日本社会の現実からみれば、既存の近代化路線に押し流されて徒労に帰した。しかしながら、彼自身にとっては、期せずして晩年に『大徳国学校論略』と巡り会えたこと、そして同書を日本に『徳国学校論略』として翻刊して生涯を全うしえたことは、学問的大成を期して青年期に江戸の象山塾に学び、恩師象山が提唱した「東洋道徳・西洋芸術」という学問思想を継承し、郷里長岡という地域的パラダイムを超えて、日本の近代化過程に関与できたことは、実に幸運な人生であったといえる。虎三郎の『徳国学校論略』の翻刊という業績は、恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」という思想世界を、明治初期の日本近代化過程に具体化した功績の一つとみてよいのではないか。このことが、結論として指摘できる第四の特徴である。

以上にみてきたように虎三郎の『徳国学校論略』の翻刊は、明治初期の日本近代化過程におけるドイツ型の学校教育モデルの最初の本格的な紹介であり、それによって先行するフランスやアメリカをモデルとした日本教育の近代化が内在する問題性を指摘するところとなった。虎三郎の『徳国学校論略』は、日本に紹介された体系的なドイツ教育書の嚆矢である。この彼の先駆的な業績は、結果的には明治２０年前後における近代化モデルのドイツ型への転換を先取りする契機になった、と評することができるであろう[72]。

【付記】本稿は、今から２０年近くも前の旧稿「明治初期日本近代化を巡るドイツと中国の歴史的位置－象山門人・小林虎三郎翻刻『徳国学校論略』の分析－」（世界教育日本協会『教育新世界』第３０号、１９９０年１１月）を抜本的に見直し、大幅に増補改訂したものである。初出の拙稿は、親しく御昵懇を給わった、今は亡き東京都立大学名誉教授の三井為友先生から依頼され、急ぎ執筆した論文であった。それ故に、『独国学校論略』からの引用も原文そのままの漢文で読みにくく、極めて生硬稚拙な出来栄えであった。今回は、近く出版予定の拙著（仮題『米百俵の主人公・小林虎三郎－日本近代化と象山門人の教育的軌跡－』）の中の一章として収録すべく、小林虎三郎翻刻『徳国学校論略』の原漢文を平易に読み下して引用紹介し、また分量的にも旧に倍した新たな論攷に書き改めた次第である。

【注記】

（１）丸山真男『「文明論之概略」を読む（上）』（岩波新書、１９８０年）を参照。

（２）長岡藩において幕末維新期を代表する典型的な人物は、何といっても戊辰戦争時の長岡藩総督河井継之助である。その彼に比べて、同じ象山塾門人であった小林虎三郎や三島億二郎は、いわば隠れた存在であった。三島に関しては、地元研究者の努力によって長岡の復興と近代化に向けて彼が推進した諸事業が解明されてきた。その代表的な成果が、今泉省三『三島億二郎伝』（１９５７年）である。他方、虎三郎の人と思想に関しては、彼が没して１０余年の後に、虎三郎の外甥（妹の子息）に当たる小金井権三郎、良精の兄弟が、関係史料を蒐集して遺稿集を編み、象山塾同門の勝海舟の「題詞」や北沢正誠の「序」を付して『求志堂遺稿』と名づけ、明治２６年（１８９３）、虎三郎の十七回忌の記念に刊行した。その後、地元長岡では、松下哲蔵『小林病翁伝』（越佐新報社）などが刊行された。だが、虎三郎に関する資料分析や現地調査を経て、彼の全体像を初めて明らかにしたのは、作家の山本有三であった。彼は、丹念な資料調査を踏まえた上で、戯曲『米百俵』をまとめ、昭和１８年（１９４３）に出版した。同書には、詳細な「注」と論文「隠れたる先覚者　小林虎三郎」、および長文の「そえがき」とが付されていた。この山本有三の一連の業績によって、虎三郎の存在が全国的に知られるところとなった。なお、昭和５０年（１９７５）には、地元の長岡市が、有三の同書に関係資料を付して『米百俵　小林虎三郎の思想』を復刊した。

（３）例えば、虎三郎が翻刻した『徳国学校論略』の存在について指摘している先行研究としては、尾形裕康『西洋教育移入の方途』（野間教育研究所紀要第１９集、１９６１年、講談社。同書は、後に『学制成立史の研究』、校倉書房、１９７３年に収録）がある。同書には「翻訳教育書部門別一覧表」（４４４頁）が付されており、箕作麟祥訳『百科全書 教導説』を最初として、第三番目に『徳国学校論略』が記録されている。

なお、同書には、明治２年（１８６９）刊行の内田政雄訳『和蘭学制』を端緒とする「翻訳教育書原著国別刊行状況」の一覧表（１６９頁）が掲げられているが、その

「ドイツ」の項の最初は明治７年（１８７４）となっている。具体的な書名はあげられてはいないが、これは虎三郎翻刻の『徳国学校論略』をさすものと推察される。この他の先行研究、例えば平松秋夫『明治時代における小学教授法の研究』（理想社、１９７５年）には、「わが国がドイツに学ばんとするの風は、特に医学関係において、早くからみられた傾向であるが、教育に関しても、明治七、八年頃に、ドイツの教育制度が相次いで紹介されるに至っている。小林病翁訓点の『徳国学校論略』、柴田承桂の『普魯士学校規則』」、などが其の代表的なものである」（同書１２４頁）と記されている。筆者の管見の限りでは、日本に紹介された体系的なドイツ教育書は、小林虎三郎の『徳国学校論略』が嚆矢であったとみられる。

（４）拙稿「門人帳資料『訂正及門録』からみた象山塾の入門者」（日本歴史学会編『日本歴史』第５０６号収載、１９９０年７月）を参照。

（５）『省萱録』（信濃教育会編『増訂象山全集』第一巻に収録）、同書２１頁。

（６）長岡市史双書第３４巻『小林虎三郎の求志洞遺稿』（長岡市、１９９５年）、２１７頁。

（７）『求志堂遺稿』に寄せられた象山塾後輩の北沢正誠による「序」。

（８）『求志堂遺稿』所収の「小林寒翠翁略伝」（同書、３頁）には、「尋いで朝廷、翁を徴して、文部省の博士に挙ぐ。翁、病を以てこれを辞す。」（原文「尋朝廷徴翁。挙文部省博士。翁以病辞之。」）と記されている。

（９）筆者は、１９９７年に、中国で出版された漢文の原著書『大徳国学校論略』の所在の確認と同書の複写を、中国上海の復旦大学に依頼した。その結果、同大学から「上海市歴史文献図書館蔵」の原著書の複写版を恵送された。

（10）小林虎三郎が翻刊した漢書『徳国学校論略』は、上下２冊本として明治７年１０月に「求志楼蔵梓」で刊行された。以下の叙述における『徳国学校論略』の引用は、全てこの「求志楼蔵梓」の版によるものとし、その場合、単に『上巻』あるいは『下巻』と略記する。

（11）『徳国学校論略』の原著者である「花之安」に関する経歴は、主として『岩波　西洋人名辞典』（増補版、岩波書店、１９８１年）を典拠としたが、併せて平凡社『アジア歴史辞典』やマイヤー『歴史辞典』も参照した。なお、上記の『岩波　西洋人名辞典』によれば、彼の著作には、『大徳国学校論略』（１８７３）の他に、『馬可講義』（１８７９）、“Introduction to the Science of Chinese Religion”,1879、“The

Mind of Mencius", 1879、など数冊があげられている。

(12) ドイツ人宣教師「花之安」すなわち「Fa' ber Ernst」が赴任した中国香港の教会「中国基督教礼賢会香港区会」は、ドイツのキリスト教会「徳国礼賢差会」が１８４７年に建立したもので、そこに本国から宣教師として派遣されたのが『大徳国学校論略』の原著者であった（「中華基督教礼賢会社由徳国礼賢差会於一八四七年在中国建立，徳国礼賢差会属信義宗礼系」。なお、この教会は現存し、幼稚園から中学校までの学校を運営し、今なお中国社会の教育文化の普及に貢献している。（以上の資料は、同教会のホームページに掲載された資料より引用した）。

なお、比屋根安定著『支那基督教史』（生活社、１９３５年）には、礼賢会（Rhenische Missionsgesellschaft）は、道光２７年に中国の香港に開教された独逸系の伝道教会であること（同書、２７３頁）、またドイツ人の中国伝道の先駆者（カアル・フリイドリッヒ・ギュッツラフ、Karl Friedrich Gützlaff 郭実獵）が、アヘン戦争の勃発時に「ドイツの各教会が一致して支那伝道に当たるべしと唱えたとき、これに礼賢会は賛同せず、独立して宣教師を支那に派遣」したこと（同書２７５頁）、ギュッツラフは「支那人牧師を養成して外国宣教師の監督の下に布教に従事させる案を考えたので、先ず彼等宣教師に支那語の研究を始めさせた」（同書２７７頁）ことなど、貴重な情報が記述されている。

(13) 中国上海の教会「同善会」（Allgemeiner Evangelisch Protestantischer）に関して、前掲『支那基督教史』には、光緒１１年（明治１８年、１８８５）に中国上海に開教された伝道教会であったこと（２７３頁、２７７－２７８頁）、その開教に際しては『大徳国学校論略』の原著者であるファベル「花之安」を招聘したこと（同書、２７７－２７８頁）などが記述されている。

(14) 中国へのキリスト教の新教各派の伝道では、１８０７年のイギリス「倫敦会（馬礼遜）」が最も早く、次いで１８２７年のオランダ「和蘭教会（郭実獵）」、１８３０年のアメリカ「米国公理会（裨治文）」と続き、出遅れた独逸は１８３２年の「独逸賢礼会（レテリガー）」が最初であった（佐伯好郎『清朝基督教の研究』春秋社、１９４９年、４７９－４８３頁を参照）。『大徳国学校論略』の著者である花之安（Ernst Faber）が、最初に赴任した「独逸礼賢会」の中国進出は、アヘン戦争後の１８４７年であった。彼が「独逸礼賢会」から脱会して独立し、個人布教を経て新たに入会した「独逸同善会」の中国進出は１８８４年とさらに遅く、ドイツは、中国への基督教

伝道においても後進国であった（以上は、佐伯好郎『清朝基督教の研究』、春秋社、１９４９年、４７９－４８３頁を参照）。

(15) 前掲、『支那基督教史』、２７７－２７８頁。

(16) 前掲、『清朝基督教の研究』、４５６頁。

(17) 同上、『清朝基督教の研究』、４２４頁。

(18)『大徳国学校論略』の著者であるドイツ人宣教師「花之安」のごとく、中国に在留した欧米のキリスト教宣教師たちが、如何に中国語に精通していたかについては、「明末から清初、就中、順治以後三百年間に亘り中国で出版された天主教宣教師等の漢文を以てせる著書に至っては、汗牛充棟も啻ならざるものがあった」（同上、『清朝基督教の研究』、１７９頁）といわれるごとく、漢文で書かれた著作物が膨大な数に上ったという事実からも理解できる。

(19) 虎三郎は、明治４年（１８７１）に長岡から上京した後は、実弟の雄七郎の住む東京向島の邸宅に身を寄せていた。翻刻した『徳国学校論略』の自序に、虎三郎が「越後病翁小林虎、東京居る所の求志楼に撰す」と記されているように、東京での居宅を版元とし、これを「求志楼」と称して同書の表紙に刻印した。

(20) 山本有三『米百俵』、新潮社、１９４３年。

(21) 松本健一『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』、新潮社、１９９２年。

(22)　同上、『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』、２１７頁。

(23) 星新一『祖父・小金井良精の記』、河出書房新社、１９７４年。

(24) 虎三郎の甥である小金井良精の最初の妻は、虎三郎の象山塾の後輩である信州松本藩出身の小松彰の姪（妹の娘の八千代）であった。良精は、明治３年（１８７０）の夏、１３歳で越後長岡から上京して大学南校（東京大学の前進）に入学する。が、同校を退学し、明治５年（１８７２）には大学東校（東京大学医学部の前身）に入学した。やがて、同校を首席で卒業した良精は、ドイツへの官費留学が叶い、医学者の道を歩むことになる。

その良精が、越後長岡から上京して以来、全面的に経済支援を仰いだのが、小松彰をはじめとする小松一族であった。そのような深い縁で小松家と結ばれていた良精は、ドイツ留学から帰朝後、小松彰の姪（実弟で文部省や内務省の官職を歴任した小松維直の娘）と結婚する。明治１８年１１月、良精２８歳のときであった。だが、不幸にも結婚して半年後の翌年６月の初めに、新妻は病没してしまった。その後、東京帝国

大学医科大学の解剖学教授に出世した良精は、独身で学究生活に没頭していたが、明治２１年３月、医学部同窓の友人の仲介で森林太郎（鴎外）の妹・喜美子と再婚する。そのときの森は、陸軍軍医としてドイツ留学中であり、鴎外と名乗って作家活動を開始する前のことであった。（以上は前掲『祖父・小金井良精の記』、山崎正和『鴎外闘う家長』その他を参照）。

(25) 同上、『祖父・小金井良精の記』、６３頁。

(26) 前掲、松本健一『われに万古の心あり－幕末藩士　小林虎三郎』、２２７頁。

(27) 稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』、福村書店、１９５６年。実は、同書の初版は、戦時中の昭和１９年（１９４４）に創元社から『明治初期教育思想の研究（教育史研究第一）』として刊行されていた。後に、改訂版として再刊されたのが同書である。本稿の中での引用は、全て改訂版によった。

(28) 同上、『明治初期教育思想の研究』、１４４－１４５頁。なお、同書の引用文の中では、『徳国学校論略』の刊行を「明治十年十月翻刊」と記しているが、それは明らかに「明治七年十月」の誤りである。

(29) 前掲、『清朝基督教の研究』、４６２－４６５頁を参照。

(30) 同上、『清朝基督教の研究』、４６５頁。

(31) 漢書『大徳国学校論略』の「上巻」に収録された原著者「花之安」の「序」。中国版は漢文、いわゆる「白文」であるが、虎三郎が訓点を施した翻刻版の原文は次の通りである（以下の原文引用は、全て虎三郎校訂の『徳国学校論略』によるものとする）。

「毎見乙華士徒体二泰西之器芸一、而棄二其聖道一、不甲レ知丁器芸葉也、聖道根也、器芸流也、聖道源也、無レ根則木必隕、無レ源則川不流、掇二其糟粕一、而遺甲其精華上、甚為惜レ之、伝レ道之余、嘗輯二徳国学校一書一、略言二書院之規模、為レ学之次第一、使丙海内人士、知乙泰西非二僅以丁器芸上見一レ長、器芸不甲レ過二蹄涔之一勺一耳」

(32) 同上、「上巻」収録の校訂者「王炳堃」の「序」。翻刻版の原文は次の通りである。

「余少游二西士之門一、粗聞二西士之学一、但書院之規模、為レ学之則例、未二之前聞一、比与二牧師花先生一同レ事数年、暇校二徳国学校一書一、　見二其制度之贍詳、読書之次第一、於二学術一大有レ裨焉、近来徳国蒸蒸日上、文徳武功、麟麟炳炳、知三棫樸菁莪之盛、有二自由一矣。学校繫レ乎二一国之盛衰一。」

(33) 同上、「上巻」収録の推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は、「美国衞公使問序於余」。

(34) 同上、推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は次の通りである。

「徳与二諸鄰国一戦、必大勝レ之、夫徳之鄰、皆強国也、而徳之兵、必出レ於二学校一、人人向レ義、故能勝レ之、竊歎徳之用レ兵、何以甚合二我中土聖人之教一也、以二不レ教民一戦、是謂レ棄レ之、徳人其知レ之矣 。」

(35) 同上、推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は、「無二地無一レ学、無二事非一レ学、無二人不一レ学」。

(36) 同上、推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は、「其国之公令、八歳以上、不レ入レ学者、罪二其父母一、故食二徳之毛一、践二徳之土一、必入二徳之学一矣」。

(37) 同上、推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は、「将レ見二人才輩出、其国必日盛二一日一」。

(38) 同上、推薦者「李善蘭」の「序」。翻刻版の原文は、「雖レ有二良材一、不レ学則廃、国無二不レ墾之地一、則米粟不レ勝レ食、国無二不レ学之人一、則賢才不レ勝レ用、国之盛衰繫レ乎レ人、徳国学校之盛如レ此」。

(39)『小林虎三郎の求志洞遺稿』(長岡市史双書第３４巻、１９９５年)、２１９頁。

(40) 虎三郎が翻刻した『徳国学校論略』の「上巻」に所収、虎三郎自身の「翻刊徳国学校論略序」(以下「序」と略記)。翻刻版の原文は次の通りである。

「地生レ民。民聚為二一大団一。是謂レ国民乃国之体也。故民強則国強。民弱則国弱。国之強弱、係レ乎二民之強弱一。何謂二民之強一、何謂二民之弱一。其能励レ学勉レ業。有レ勇知レ方者。謂二之強一。其弗レ能レ然者。則弱也耳。民而果能励レ学勉レ業。有レ勇知レ方矣。其数雖レ寡。国得二以為一レ強。若弗レ能レ然也。即其数雖レ多。国弗レ免レ乎レ弱。」

(41)「興学私議」は、象山塾時代に罪をえて郷里長岡の自宅（求志洞）に謹慎して６年目の安政６年（１８５９）の春、信州松代に蟄居する恩師の象山宛に書かれた全文４０００字を超える漢文体の処女論文であった。虎三郎が、象山塾での学習成果を踏まえて自己の学問と思想を体系的に表現した最初の作品である。その内容は、標題の通り、「興学」による「人材」の育成登用こそが「国家万世」の根本であるとする教育立国の主張と、その思想に基づく教育改革案の提唱とからなっている。

(42) 虎三郎翻刻『徳国学校論略』の「上巻」に所収の虎三郎の序文。翻刻版の原文は、「威を八溟に展ぶ」は「展二威八一溟)」、「萎爾して振るわず、毎に外侮に苦しむ」は「萎爾弗振。毎苦二外侮一」。

(43) 同上、虎三郎の序文。翻刻版の原文は次の通りである。

「惟由レ於二欧米各国之民。率皆能励レ学勉レ業。有レ勇知レ方。而支那之民。則弗一レ能レ然焉爾。（中略）亦惟レ由於下欧米各国。教レ民之具。与二其法一。莫レ不二備且悉一。而支那則上弗レ能レ然焉爾。」

(44) 同上、虎三郎の序文。翻刻版の原文は、「欲下啓二迪其民一。変レ弱為レ強。以強中其国上者。不レ倣二欧米各国之所一レ為。而又何所求。」。

(45) 注（３）を参照。なお、明治５年に発布された「学制」の前後における欧米先進諸国の学校制度等に関する翻訳紹介状況については、前掲の尾形裕康『西洋教育移入の方途』に収められた「翻訳教育書部門別一覧表」（１７９－１８７頁）を参照。また、フランス学制を中心とした欧米学校教育制度が、日本の「学制」に及ぼした影響に関しては、同氏の『学制実施経緯の研究』（昭和３８年、校倉書房）の「学制と西洋教育制度との比較一覧表」（９８－１３０頁）および「学制と西洋教育制度との類似点摘出表」（１３１－１３４頁）などを参照。

(46) 同上、尾形裕康『学制実施経緯の研究』、９３頁を参照。

(47) 虎三郎翻刻『徳国学校論略』所収、小林虎三郎「序」。翻刻版の原文は次の通りである。

「徳国即独乙。而今之独乙則普国也。普国旧独乙之一部耳。迨二輓近一。其民益励レ学勉レ業。有レ勇知レ方。国由レ是而駸々日昌。蓄力レ養レ威。見レ機而動。勢如レ決レ河。東挫レ墺。南破レ仏。遂統二括独乙諸部一。以二英魯之雄一。猶且畏レ之。蓋其国。学校最盛。教育最行。為二欧米各国所一レ推。日已久矣。故其民愈強国愈強之効如此。」

(48) 同上、小林虎三郎「序」。翻刻版の原文は、「欲下於レ定二強レ民強レ国之基礎一。有中万一之補上云爾」。

(49) 虎三郎翻刻『徳国学校論略』の「上巻」、１頁。翻刻版の原文は、「初訓以二幼学問答、聖経章節撮要、聖経来歴撮要、本国地理説略、数学要略、神詩要略一」。

(50) 同上、「上巻」、１頁。翻刻版の原文は、「諸生至二学満之年一、未レ能三升上二首班者一、不レ得二出レ院就一レ芸、罰仍（ナホ）留二院内一、再学多年」。

(51) 同上、「上巻」、１頁。翻刻版の原文は、「迨二先生入一レ館、見三生徒有二未レ至者罰之一、先生到レ館、各要二起立示一レ敬」。

(52) 同上、「上巻」、２頁。翻刻版の原文は、「許三其半日在家以助二父母一」。なお、明治５年発布の学制では、「小学校ハ教育ノ初級ニシテ人民一般必ス学ハスンハアルヘカラサルモノトス」（第２１章）と規定したが、貧困家庭では貴重な労働力であった児

童を就学させることはできなかった。就学率の低下に悩む文部省は、これを打開すべく、明治１８年（１８８５）の改正教育令で、「土地ノ景況ニ依リ午前若シクハ午後ノ半日又ハ夜間ニ教授スルコトヲ得ベシ」（第１２条の但書）と付記し、就学児童が半日のみ登校して授業を受けること、すなわち「半日学校」を初めて公認した。吉田熊次は、「此の半日学校制度は、独逸の学制を模倣したものであろうと思はれる」（『本邦教育史概説』、１９２２年、目黒書店、３４４－３４５頁）と記している。

(53) 同上、「上巻」、１２頁。翻刻版の原文は、「泰西技芸与二中国一不レ同」。

(54) 同上、「上巻」、１２頁。翻刻版の原文は、「技芸之為レ理甚深」。

(55) 学校を構成する１２の学科は、原文では次の通りである。「第一科課二金類一、第二科課二陶煉一、第三科課二石作一、第四科課二営造一、第五科課二配合帰当之法一、第六科課レ煉二各種引レ火之物一、第七科課レ製二元明粉朴硝白礬(はん)青礬各種金塩及諸顔料一、第八科課二織造一、第九科課二屠解一、第十科課レ紙作二圧印一、第十一科二課糧一、第十二科課レ論レ製糖」（同上、「上巻」、１４－１５頁）。

(56) 同上、「上巻」、１９頁。翻刻版の原文は、「制レ勝之道、将貴レ謀兵貴レ勇」。

(57) 同上、「上巻」、２６頁。翻刻版の原文は、「農為国本」「農以為二富レ国裕レ民之一助一云」。

(58) 同上、「下巻」、３３頁。翻刻版の原文は、「婦女具二有霊魂一、才能与二男子一無レ異」。

(59) 同上、「下巻」、３３頁。翻刻版の原文は、「丈夫在レ家之時少、婦人在レ家之時多、訓二子女一、母之功多」。

(60) 同上、「下巻」、３３頁。翻刻版の原文は、「婦女不レ知レ書、只為二酒食是議一、則酒食之外、豈知二尚有二無窮道理一也」。

(61) 同上、「下巻」、３３頁。翻刻版の原文は、「天賦レ人以二霊明之性一」。

(62) 同上、「下巻」、３３－３４頁。翻刻版の原文は、「他如丈夫博学文儒、而婦人不学粗鄙、何趣之有、家中諸事婦幹レ之、不学何能操置得レ宜」。

(63) 同上、「下巻」、３４頁。翻刻版の原文は、「蓋古者女学、与二男学一並挙」。

(64) 同上、「下巻」、３４頁。翻刻版の原文は、「女学非二経聖人之所一レ言」。

(65) 同上、「下巻」、３４頁。翻刻版の原文は、「以二古来才女多陷一レ淫」。

(66) 同上、「下巻」、３４頁。翻刻版の原文は、「今人養レ女、多レ不教二読レ書認一レ字」。

(67) 同上、「下巻」、３９頁。翻刻版の原文は、「凡生而癡呆者、送入二院中一、医生細察二其致レ病之由一、設レ法治レ之」。

(68) 同上、「下巻」、３９頁。翻刻版の原文は、「有二一日之生一、亦尽二人一日之分一」。

(69) 同上、「下巻」、３９頁。「百人入レ院約九十、異日レ可為二良民一」。

(70) 同上、「下巻」、３９頁。翻刻版の原文は、「今在二香港天主教一、亦有二此挙一、特為二華民一而立」。

(71) 同上、「下巻」、４４頁。翻刻版の原文は次の通りである。

「今西士来二中土一、建二立礼拝堂一、亦欲下陶二淑斯民一、使上レ知下昭二事上帝一、保レ身救レ霊之道上、吾願華人早日信奉、去二其積習、同為二上帝之民、大君之子一、将レ見下風俗之隆、成レ於二一郷一邑一、風俗之隆、達上レ於二溥海内外一、余将二拭レ目俟一レ之」

(72) 日本における教育近代化のドイツ・モデルへの転換に関しては、種々の先行研究があるが、比較的平易に鳥瞰している論考としては、前掲の平松秋夫『明治時代における小学教授法の研究』（１２４四－１２６頁）がある。同書において、「わが国がドイツに学ばんとする風は、特に医学関係において、早くからみられた傾向であるが、教育に関しても、明治七、八年頃に、ドイツの教育制度が相次いで紹介」されたと述べ、その端緒なった先駆的な事例として虎三郎翻刻の『徳国学校論略』をあげている（同書、１２４頁）。